

JAUW 公開シンポジウム 2020

教育・ジェンダー・共生

ーコロナ禍を契機にみえてきた教育の本質ー



一般社団法人 大学女性協会
Japanese Association of University Women



2020年度 一般社団法人 大学女性協会 公開シンポジウム

教育・ジェンダー・共生

—— コロナ禍を契機にみえてきた教育の本質 ——

日時：2020年10月18日(日) 13:30~16:30
 会場：TIME SHARING 四谷 B 〒169-0004 東京都新宿区四谷3-9 第一光明ビル 5F
 主催：一般社団法人 大学女性協会
 形態：ZOOMによるオンラインシンポジウム(事前申込制)と対面参加の併用
 参加費：会員・一般 1,000円 (ZOOMによる参加・対面参加とも) 学生 無料
 問合せ：一般社団法人 大学女性協会 TEL: 03-3358-2822 (月~金の11:00~15:00)

開催趣旨
 コロナ禍の影響は、医療保健の分野だけでなく、社会経済や私たちの生活全般に波及し、これまで死
 角化されてきた様々な社会問題を顕在化させました。緊急事態宣言の発令よりひと月以上も前に出た一斉休校の
 措置によって、教育機会は深刻な形で失われました。繰りかえし「学校」教育のチャンスだったはずの在宅の日々
 も、「居場所」教育に置きかえられた人々を戸惑わせた。その中で、子ども達を教育するのには家庭環境
 の差、教育とは何か、との本質的な問いが浮かび上がってきました。今回のシンポジウムでは、コロナ禍で
 見えてきた教育の本質を、とくに「教育」に焦点をあてて追究していきます。
 このシンポジウムの基調講演者中村桂子氏は「自然の中の人間」という立脚点に立って「生命誌
 (Biotaxony)」を提唱。「まず命に向き合えよう。コロナはそう言っている」と語られます。中村桂子
 氏の提議を聴き、私たちの「これまでに」向き合い、「これから」を創出する時間を共有したいと思います。
 参加費一人ひとりの行動と連携につながりますように。

基調講演 中村 桂子氏 (J-T生命誌研究館 名誉館長、理学博士)

パネルディスカッション
 コーディネーター 城倉 純子 (一般社団法人 大学女性協会 副会長)
 パネリスト 中村 桂子氏 (神奈川大学文学・教育学部 教授)
 本多 さくら 氏 (豊田大学文学部のマダム・カール「ふじまサロンの」)
 中道 真子 氏 (奈良女子大学附属中等教育学校 教務長)
 中村 桂子氏 (J-T生命誌研究館 名誉館長、理学博士)

コメント 中村 桂子氏 (J-T生命誌研究館 名誉館長、理学博士)

プログラム

時間	内容
13:30	開会式・基調講演
14:00	パネルディスカッション
14:40	パネルディスカッション
15:30	閉会式
16:30	退席

アクセス

・東京メトロ丸の内線 四谷三丁目駅徒歩1分
 ・JR中央線 四谷駅 徒歩12分
 四谷三丁目交差点から駅に向かって左側
 サイゼリヤやワンダラッグの入り口から入ります



会長 加納孝代



副会長 城倉純子



副会長 森川淳子

講演者のプロフィール

中村 桂子 氏

JT 生命誌研究館 名誉館長



1959 年東京大学理学部化学科卒。同大学院生物化学修了。理学博士。
三菱化成生命科学研究所人間・自然研究部長、早稲田大学人間科学部教授、大阪大学連携大学院教授などを経て、2020 年 3 月まで JT 生命誌研究館館長。
著書に、「生命誌とは何か」（講談社学術文庫）、「自己創出する生命」（ちくま学芸文庫）、「科学者が人間であること」（岩波新書）、「中村桂子コレクションいのち愛づる生命誌」全 8 巻（藤原書店）、「ふつうのおんなの子のちから」（集英社）ほか多数。
人間は生きものであり自然の一部であるということを基本に置く知と社会の構築を求める日々を送っています。

中野 真依 氏

神奈川学園中学・高等学校 教諭



東京工業大学理学部卒。
民間企業に 13 年間の勤務後、教職の道に進む。教職歴 6 年。生徒数 1200 名の私立中高一貫女子校に赴任して 5 年目。理科(物理)担当。
今年 4 月に始まった全国の教員ネットワーク：コロナ禍における「生徒の気づきと学びを最大化するプロジェクト」に参加。
いま学校現場が抱える課題やこれからの学校の在り方について対話を重ねています。10 代のうちに学んでほしいことは、一生モノの「学び方」です。そのためにも、生徒に教えすぎないこと、与えすぎないことを心がけています。

本多 さくら 氏

静岡県富士市のママさんサークル「ふじママサロン」



2006 年早稲田大学大学院理工学研究科修了。技術士（化学）。
メーカー研究員。静岡県富士市で「親子で学ぶ」「働くママ」をキーワードにした「おやこそだちの会」を主宰。市内の子育て活動主催者による団体「ふじママサロン」では、地域の子育て環境をより良くするため活動中。コロナ禍では「学校休校・再開に関するアンケート」を実施。結果を基に教育委員会、市議会への情報提供、ディスカッションを行いました。2 児の母。
仕事が好き。子どもと遊ぶのも好き。実は家事は苦手です。

中道 貞子 会員

奈良支部、元奈良女子大学附属中等教育学校副校長



1947 年生まれ、奈良女子大学卒。
奈良女子大学附属中等教育学校(以前は文学部附属中・高校)において、30 年間理科(生物)教員として教鞭をとり、その後同校副校長を 5 年間務めて退職。
「生きものに学ぶ生物教育」「生きものはすごい！生物はおもしろい！」を伝えることをライフワークとして生物教育に関わっています。
また、2002 年からはアフガニスタンの教育に関わることになり、今もバーミヤンにある小さな学校と交流を続けています。
現奈良女子大学国際交流センター客員センター員。



2020 年度 一般社団法人 大学女性協会 公開シンポジウム

教育・ジェンダー・共生

—— コロナ禍を契機にみえてきた教育の本質 ——

日 時 : 2020 年 10 月 18 日 (日) 13 : 30 ~ 16 : 30

会 場 : TIME SHARING 四谷 B

〒160-0004 東京都新宿区四谷 3-9 第一光明堂ビル 9F

主 催 : 一般社団法人 大学女性協会

プ ロ グ ラ ム

＜第一部＞ 基調講演

総司会 副会長 森川 淳子

13:30 開会

挨拶

(一社) 大学女性協会 会長 加納 孝代

13:40

基調講演

中村 桂子 さん (JT 生命誌研究館 名誉館長、理学博士)

＜第二部＞ パネルディスカッション

コーディネーター 副会長 城倉 純子

14:40

発表・報告

パネリスト発題

中野 真依 さん

(神奈川学園中学・高等学校 教諭)

本多 さくら さん

(静岡県富士市のママさんサークル「ふじママサロン」)

中道 貞子 さん

(奈良支部、元奈良女子大学附属中等教育学校 副校長)

15:30

コメントおよびディスカッション

コメンテーター 中村 桂子 さん

16:30

閉会

大学女性協会 公開シンポジウム 開催趣旨

コロナ禍の影響は、医療保健の分野だけに留まらず、社会経済や私たちの生活全般に波及し、それまで死角化されてきた様々な社会問題を露呈させました。緊急事態宣言の発令よりひと月以上も前に出た一斉休校の措置によって、教育機関は混乱しました。縛られない「手作り」教育のチャンスだったはずの在宅の日々も、「おまかせ」教育に慣れきった親たちを戸惑わせました。その中で、子ども達を教育するのは本来誰なのか、教育とは何か、との本質的な問いが浮かび上がってきました。今回のシンポジウムでは、コロナ禍で見えてきた諸問題のなかでも、とくに「教育」に焦点をあてて追究していきます。

このシンポジウムの基調講演者中村桂子氏は「自然の中の人間」という立脚点に立って「生命誌 (Biohistory)」を提唱、「まず命に向き合ひましょう。コロナはそう言っている」と説かれます。中村桂子氏の発題を受け、私たちの「これまで」に向き合い、「これから」を創出する時間を共有したいと思います。参加者一人ひとりの行動と連携につながりますように。

目次

2020 年度公開シンポジウム

開会 あいさつ.....	1
一般社団法人 大学女性協会 会長 加納 孝代	
基調講演	
人間は生きものという原点	
～新型コロナウイルスのパンデミックの中で～.....	2
JT 生命誌研究館 名誉館長、理学博士 中村 桂子	
パネルディスカッション 挨拶.....	11
一般社団法人 大学女性協会 副会長・企画委員長 城倉 純子	
発表	
1. コロナ禍における学校の状況と模索	
～一つの学校の挑戦～	12
神奈川学園中学・高等学校 教諭 中野 真依	
2. コロナ禍を母親の視点から考える	16
静岡県富士市のママさんサークル「ふじママサロン」 本多 さくら	
3. 気づきから変容へ	
～コロナ禍だからこそ活かそう 新学習指導要領の視点～.....	21
奈良支部、元 奈良女子大学附属中等教育学校副校長 中道 貞子	
パネルディスカッション.....	27
中野 真依／本多 さくら／中道 貞子／中村 桂子／城倉 純子	
アンケート結果報告.....	32
シンポジウムを終えて.....	35
シンポジウム企画委員長 城倉 純子	
メッセージ.....	36
国連事務次長・軍縮担当上級代表 中満 泉	

あいさつ

一般社団法人 大学女性協会 会長 加納 孝代

本日は大学女性協会の全国公開シンポジウムにご参加くださり、ありがとうございます。この催しはこの会場における対面方式と併せて、オンラインでも行われます。いまこの時間に全国のあちこちで五十名を超える方々がパソコンやタブレットの前に坐り、このシンポジウムに参加しておられます。

本日の参加者の中には大学女性協会の会員ではない方もおられますので、簡単に大学女性協会のご紹介をいたします。大学女性協会とは、高等教育—日本の場合は4年制大学と2年制短期大学を含みます—を受けた女性には、社会に貢献する使命があると考えた人々の集まりです。

大学という高等教育機関はそのほとんどが19世紀に欧米で設立されましたが、そのほぼすべてが男性のためのものでした。「女性にも大学で学ぶ権利がある」と考える女性たちの声が大きくなったのは第一次世界大戦前後です。ちょうどその頃日本からアメリカに留学していた女性たちが帰国後、「女性も大学に入学できるように」との運動を展開してゆきました。そして第二次世界大戦終了後、アメリカから来た、同じ理念を持つ人々の後押しを得て、女性も大学に入学できるようになりました。大学女性協会という組織が日本にできたのは1946年で、今年は創立74年目にあたります。

私たちの信念は、女性も男性と同様、良い社会を創るために貢献すべきだということです。そのためには女性も男性同様、高等教育機関で学び、力をつけねばなりません。女性の高等教育を推進し、女性の活動の場を広げ、政策決定にも女性に関わるようになれば、社会はもっと公平で温かで豊かなものになる、と私たちは信じます。

このような使命感のもとに大学女性協会では毎年セミナー、そしてシンポジウムを交互に計画し、学び続けてきました。今年は「教育・ジェンダー・共生」というメインテーマのもとにサブテーマ「コロナ禍を契機に見えてきた教育の本質」を掲げました。

基調講演者には大阪高槻市にあるJT生命誌研究館の名誉館長中村桂子先生をお迎えしました。中村先生は東京出身で、麹町小学校、中学校、お茶の水女子大学附属高等学校を経て、1954年東京大学にご入学、理学部化学科に進み、大学院では生物化学を専攻されました。先生の研究は大変に幅広く、短時間に述べることはできませんが、ご本が単著だけでも30冊近くありますので、お手に取ってお読みください。中心的なお仕事の場合は1990年代から今日まで30年近く関わってこられたJT生命誌研究館です。

本日は今回全世界が大混乱に陥った新型コロナウイルスとそれが引き起こす感染症と、とくにそれが教育に及ぼした影響について、お話をうかがおうとしております。中村先生は今もご活躍中で、大変お忙しい中、私たちのシンポジウムへの出席をご快諾くださいました。大学女性協会奈良支部会員の中道貞子さんがご紹介の労をとってくれました。それでは中村先生、どうぞよろしくお願いいたします。

基調講演

人間は生きものという原点

～新型コロナウイルスのパンデミックの中で～

JT 生命誌研究館 名誉館長 中村 桂子

今世界中が目に見えないコロナに振り回されています。それは「私たちは生きもの」だからです。現代社会は「私たちは生きもの」だということを忘れて生きてきたように思えてなりません。コロナには、具体的な対処はもちろん大事ですが、教育やこれからの生き方を考えるのであれば、私たちは生きものだということの確認が大事だと考えます。

コロナ禍がなくとも私はそう考えてきましたので、我田引水ですが、人間が生きものだという当たり前のことが当たり前になっていないための問題だとして聞いていただきたいと思います。

今は明らかに転換期です。コロナ禍以前から転換期だったと思います。社会は行き詰っていると誰もが思っていました。何かが変わらなければいけないと。変わるといっても大革命を起こすということではありません。今の社会のありようをよく考えて、そこから何かを必然的に変えていこうということです。

変えていくために必要なのは新しいコンセプト、考え方です。ただし考え方を出すだけではだめで、具体的にどうするか、これをしっかり考えないといけません。前からあった課題ですけど、コロナ禍がこれを突きつけました。「今、やらなきゃだめだぜ」と言われている、そう思います。

難しいことを申し上げているみたいですが、普段考えているとても簡単なこと、どうしても今考えなくてはいけないことを、是非、皆さんにご一緒に考えていただきたいと思います。

何かを考える時に、本当に考えやすい方法は自

分の中から湧いてくるものを大事にすることではないでしょうか。一所懸命勉強して他から仕入れても本当に大事なことは考えられない。子供を育てているときに何かおかしいと思ったら、この子がよく育つには今の社会はどうあったらよいのだろうか、と考えるというように、自分の中から出発して考えることが一つ目の基本です。

二つ目は、そうはいってもあまりに自分勝手ではダメなので、今の時代はどうなっているのかということを考えています。

それから三番目は私がずっと守ってきたことであり、これは正しいかどうか、人によるかもしれませんが、こうしなければ本質を考えられなかったと私がしみじみ思っているのは、「権力からの自由」です。特に今、権力におもねることで、本質が考えられなくなっていると毎日強く感じています。

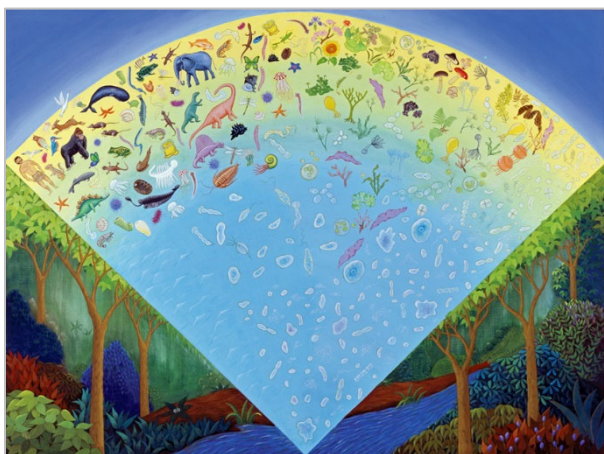
私は、女だから男だからとジェンダーでものを考えたことはないのですが、今の社会の仕組みを見ると、やはり男性は権力から自由になりにくい。かわいそうですが、そうだと思うのです。女性はある意味ではいろいろな難しい問題をかかえさせられていたが故に、自由になりやすい。権力から自由になってものを考えることができる。だから今こそ女性はその力を使うべきだと私は思います。女の人にチャンスが与えられていると思っています。

それでは何を考えるのかです。ここから先は「これが正しい、皆さんもこう考えなさい」と申

し上げるわけではありません。お話できるのは「私はこう考えてきました。こんな考え方もできます。こうであればこう考えられます。参考になさってくださいませんか」ということだけです。

私は科学の中で過ごしてきました。科学はとても面白いのですが、やっているうち何だか人間を機械のように見て、「どんどんやれよ」とか、「新しいものをどんどん作れよ」と言って、「人間は生きものだ」とは考えていないのではないかと疑問に思うようになりました。50年くらい前です。そこから「生命誌」という新しい分野の創出を考え始めたのです。

まず「人間は生きもの」とはどういうことか。次の絵をご覧ください。これは私の考え方を表した絵で、現代の生物学が明らかにしていることです。これがベースです。



協力：団まりな 画：橋本律子 JT 生命誌研究館

これは世界中の方が「考えやすいね」と言ってくさるので、皆さまにも受け入れていただけたらと思ってお示しします。扇の形をしています。この扇の「天」、いちばん上のところには、さまざまな生きものが描いてあります。地球上には多様な生きものがいます。ぜひこの「多様」というキーワードを頭の中に入れてください。ただし「多様でアリもいるね、ライオンもいてタンポポもあるよね」「ああそうですか」ではちょっと面白く

ないし、科学にはなりません。

今は中学でも習っていますが、「こんなに多様な生きものも全部細胞で成り立っている」「その中にDNAが入っている」のです。これはすべての生きものに共通で、働き方が同じなのです。こんなことが偶然おこるわけではないので、「何千万種という生きものたちの祖先は一つの細胞だった」と、現代生物学は考えています。

扇の要の所で、その細胞が生まれました。それは今から38億年前。実はどこでどう生まれたかはまだ分かっていません。たださまざまな状況から、今から38億年前の海の中には祖先細胞がいた、ということは申し上げます。

二番目に言えるのは、今いる生きものたちは全部共通の祖先を持ち、しかも38億年かけて今の多様性を得たことです。つまり私たちが生きもののかをを考える時には、この長い時間を意識することが必要です。

それから三番目に、とても大事なのですが、生きもののかをを考える時、「アリなんて大したことないよな」「ワンちゃんはすこし上等」「人間はもっと偉いよね」と、私たちは一本線で考えがちです。それも上下に考える。こうして人間をいちばん上に置きがちです。でもそれは「なし」です。この絵を見てください。いちばん右はバクテリアですし、キノコもヒマワリも人間もいます。みんな38億年という同じ時間をもって生きているのです。アリがいてライオンがいてイルカがいてゴリラがいてキノコがあって…、アリとライオンとどちらが偉いかと言っていても何の意味もない。アリはアリで38億年、ライオンはライオンで38億年、どちらも素晴らしい。そういう見方をしようというのが三番目です。

四番目は、今の教育を考える時に是非見ておいていただきたいことです。この絵の中に人間がい

まず。現代社会は、人間は扇の外、しかも上にいると思っている。「生物多様性を守らなければいけない」「地球に優しくしなければ」と。これらはとても良い言葉ですけど、完全に「上から目線」。本当は、「地球に優しくしていただきながら、私たちも優しく生きようね」ということでなければなりません。

子供たちに教育として伝える時、私たちは気持ちとして、「人間はここ、生きものたちの中にいる」ことを伝えましょう。私はこれを「上から目線」に対して「中から目線」と言っています。

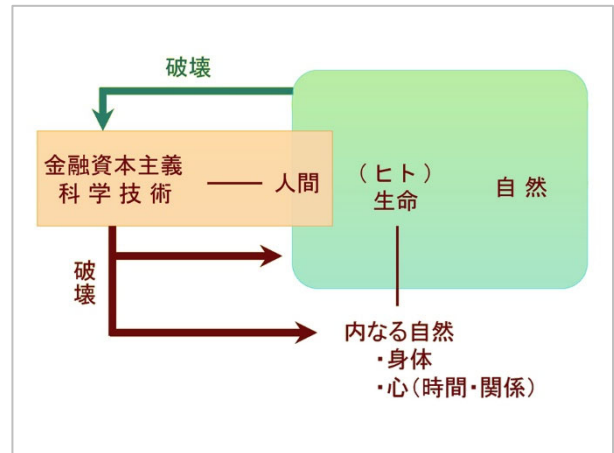
「中から目線」はとても大事です。例えば子供たちが「うぇ〜ん」と泣いたとき、上から「何したの？ ダメね!」と言ってもだめですよ。しゃがんで「どうしたの?」と言うと、子供はちゃんとお話をしてくれます。ほかの生きものたちともこんなふうに「中から目線」でいきませんか。

どうして私たちは上にいると思ってしまったのか。今の社会を支えている科学技術と経済活動は人間だけができることだからです。科学技術とお金と物が今の社会を支えていて、これで社会は進歩する。それがよいこと、人間のやるべきことと考えられてきました。でもこれが違うのではないかと、私たちはその転換点にいるのではないかと、今申し上げたいことです。

今のコロナ禍で皆さんが悩んでいるのは、コロナに対応していると経済が動かないということです。そこで、「いのちか経済か」と言われます。この問いはないでしょう。生きることが基本でありそれを支えるのが経済のはずです。

ですから、コロナへの対応と同時進行する経済は何かと考えればよいのです。今までと同様に経済を動かすために提案されている政策の一つ一つ批判的なことを言うつもりはありませんが、な

んだか下らないことにお金を使っているように見えます。そうではなくて、本当に今必要なもの、たとえばコロナ禍で生きるみんなが、分散してそれぞれが「食べ物をきちんと作ろう。そのために必要な経済サポートは何かを考えよう」という動きが必要なのではないでしょうか。



人間は自然という大きな中にいます。そこでうまくいっていればいいのですが、自然を壊してしまっています。私はコロナも地球環境問題と無関係ではないと思っています。人間が自然を破壊していったことで、コロナに限らずエボラなどいろいろのウイルスがどんどん出ています。人間が自然を壊しているためにウイルスが出てきている。

私が教育と関係して申し上げたいのは、ここに書きましたが「内なる自然」を見ることです。人間は生きものですから、私たちも自然なのです。森林など外の自然を壊す行為は私たちをも壊します。私たちの内にある自然だけを壊さないというわけにはいかないのです。内なる自然とは体と心です。明らかに今、人間の体や心が壊れていますよね。とてもたくさんの若い人たちが辛い思いをしています。

心という問題はとても複雑なので細かいことは申し上げませんが、日常で考えるとしたら、時間と関係です。「早く早く早く!」と時間を切る。

人間同士の関係を切る。今、コロナ禍でいちばん問題なのは時間を切る、関係を切るということです。関係が切られて鬱になってしまっている人たちがたくさんいます。今の社会が時間と関係をどんどん切っていることを直したいと思います。

時間と関係を壊し、若い人たちの心も壊れるような状況を変えるには「人間は生きもの」という視点が必要です。では今の社会の価値観と「人間は生きもの」と考えたときの価値観はどこが違うのでしょうか。

子供たちの未来を考えると、子供たちには新しいことをやってほしいですし、同じところで止まっていることは人間にとって良いことではありません。そこで今の社会は進歩を求めます。ここでは一つの物差しで優劣を決めます。

進歩と進化	
進歩	進化（展開）
効 率 量 均 一	過 程 質 多 様
構 造・機 能	歴 史・関 係
機 械	生 命 体

先ほど、扇の中で生きものを見ましたが、そこでは多様化していました。この場合一つの物差しで比べることはしません。

先日不登校の中学生に話す機会がありました。「命は大事だというけれど、でも私たちはご飯を食べ、豚も魚も食べるでしょう。ベジタリアンになりハウレンソウを食べるという人がいるけれど、ハウレンソウも命がある。命は大事と言いながら、生きもの食べるわけでしょ。命で考えよう、生きもので考えよう、と言うのは実はとても複雑で難しいのよ。〇か×かでは決められないのよ」

と話しました。〇か×かではないというところが一つのとても大事な点です。

話し終わった後に、男の子が手を挙げて、「さっきの〇か×かの話をもう一回してください。僕は今まで学校で〇か×かじゃないって話は一度も聞いたことがない」と言うのです。

これはとても大きな問題です。「人間は生きもの」だと思わない、何でも〇か×かで決める、〇か×かで決める時は早く決めたほうが勝ち。早く早くと急かされる、じっくり考えている子は落とされる……。「そういう中で、教育が行われているのか」としみじみ思い、機械的な考え方で、「人間は生きもの」ということを忘れるのはいけないと、つくづく思いました。

では止まっていればいいのでしょうか。科学技術の開発も社会システムの工夫もせず、縄文時代と同じように生きればよいのでしょうか。そんなことはありません。次の世代には、私たちにはできない新しいことを考え、もっと生き生きと生きてほしいと思います。

ただその時に現在の物差し一つでの進歩ではない方向を探る必要があります。

生きものが変化し進んでいくことを私たちは進化と呼びます。進化は英語では“evolution”。evolve とは本来絵巻物を展開すること。進化は展開という意味です。

進歩は一直線に進み、一番、二番、三番……を決めて、順位の下の子はだめとします。

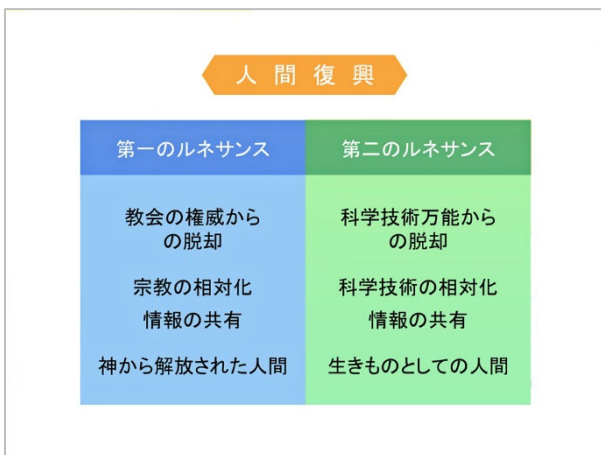
進歩は効率を求めます。大量がよくて、すべて均一で、構造と機能がわかれば良いとする、機械を相手とする時の考え方です。

他方、進化はプロセスが大事で、質が大事で、多様性が大事です。そして時間があり、関係があることが大事なのです。

中村メイコさんのお嬢さんの神津カンナさん

が我が家の近くにお住まいで、今エネルギーについて考える組織の代表を勤めておられまして、時々相談にみえます。先日彼女が、「進歩の『歩』って歩くですよ。今、みんな進走みたいに走ってる」と面白い指摘をしてくれました。そこで私が、「そうよね、『歩く』よね。しかも、歩くという字を見てごらんない、『止まる』という字が入ってますよね。歩くのは時々止まって、『ああ、お花が咲いてる』と言ったりする。お散歩ですよ。ハイゼンベルグとか湯川秀樹とか、見上げるようなすごい天才科学者がおられますけれど、そういう方たちの多くが、お散歩のときにものを考えとおっしゃる。寝ているときとおっしゃる方もありますが、お散歩の時というのも多いです。進歩という字は歩だけど、今の世の中、『進走』だというのはその通りね。歩にすれば『止まる』という字があるのにね」と言ったのです。

「考えてみると、正しいという字にも『止まる』が入っている。どう思う？ 一度止まって考えることがとっても大事だっていうことじゃないかな」とカンナさんと話しました。これは単なる思いつきであり、漢字として正しい解釈はどうかは存じません。けれども、そうやって考えるとちょっとおもしろいのではないのでしょうか。



このように考えてくると、やはり今大事なのは人間復興となります。機械を使うのはいいのです

けれど、振り回されてはいけない。私だけでなく多くの方が今を「第二のルネサンス」とおっしゃる。第一のルネサンスが人間復興でしたから今もう一回人間復興しようという意味です。

第一のルネサンスは何から復興したかという、教会からでした。神様はいいけれど、神様を笠に着た教会が偉そうにしていって、「なんだ、お前ら」と抑えつけていた。そこから解放されたのです。教会の権威から解放され、自分でものを考えながら、生き生きと生きる人になろう、というのが第一のルネサンスでした。

そのときに行なわれたのが宗教の相対化と情報の共有でした。それをしたのがアッシジのフランチェスコ。小鳥ともお話ができると言われた人。それまではお説教も聖書も全部ラテン語でしたから庶民にはわからない。わからないので、はいはいと従っていた。フランチェスコはそれをみんながわかる普通のイタリア語で書いたのです。

私は今、「生きものとしての人間を科学技術から解放しましょう」と言いたいのです。科学技術を否定はしません。科学技術を相対化するのです。科学技術は大事です。でもそれに振り回されなくて、ほんとうに自分たちで使いこなそう、そのためには情報を共有しよう、と言いたいのです。

これはとても大事です。そしてそれは今起きていることです。大学女性協会がなさっていることもこういう活動の一つだと思います。情報をみんなで共有しようということです。それが具体的な人間復興なのです。

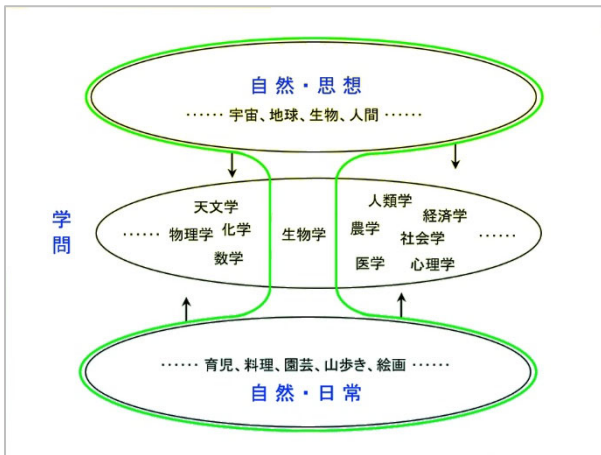
ところで第一のルネサンスは何をやったのでしょうか。塩野七生さんの説ですが、第一のルネサンスの結果、どういう人間ができたかというと、「精神的に強い人間ができた」と彼女は言います。いいですよ。私たちもそうなりたいですね。

では、精神的に強い人間とは具体的にどんな人

でしょうか。一つ目は、「なぜと問い、自分で考える人」、二つ目は、「善・悪を自らの中に引き受ける人」です。

今の社会で考えてみてください。皆さん、やっていらっしゃるんですか？ 教育も、「こういう人が人間なんだ。こういう人になるように教育するのだ」と考えながらやっていきたいと思いませんか。「人間復興」という言葉は今とても大事です。

考えてみましょう。下のスライドに「学問」と書いていますが、これは学問仲間との話のスライドをそのまま持ってきたものなので、「学問」と書いてありますが、「仕事」と書き換えられます。



自分が仕事と思っていることを考えると、「お金を儲けなくてはいけない」とか、「誰かから評価されるようにならなければいけない」などと、考え方が狭くなっていきますね。専門で考えていくと、どうしても、「一番にならなければだめだ」などと思ってしまいます。

でも、「私たちは人間です」と考えたらどうでしょうか。人間なら誰にも日常があるわけです。「私は科学の専門家です、科学者です」と言って、毎日ご飯を食べない方はいらっしゃいません。お家へ帰ってお子さんと遊んだり、お料理をしたりする「日常」がない方はいらっしゃらない。私たちが人間であればかならず「日常」という側面が

あるのです。

もう一つは「思想」の部分。ここには「自然・思想」と書きましたが、あまり難しいことを言っているのではなくて、「考える」ことです。自分で考える。私は難しいことは苦手ですが、考えることは好きです。

人間復興というのは誰もがみんな、この図のなかの、グリーンで囲んだ中で生きるということではないでしょうか。それぞれの人に思想があり、お仕事があり、日常もあるという構造です。

あるひとの学問のところに物理学と社会学、または生物学と心理学が入っていたら、それは「学際」だとか「学問の融合」だと世間ではもてはやすかもしれません。私はこれはあまり新しいものを生み出さないとと思っています。生物学者と心理学者がこのグリーンの中にいれば「うちの子がやたら泣くんですけど、どうなんでしょう」という話題に対して「やはり DNA ではわかりませんよね」と話し合い、生物学と心理学の接点が生まれてくるのではないのでしょうか。

そのような協同によって新しいことが生まれます。新しいことを生むためには、人間は専門のことだけ考えているのではだめで、日常をもつ人間として考えることが大事だと思うのです。

これを私の尊敬している大森荘蔵先生が、「密画と略画の重ね描き（かさねえがき）」とおっしゃっています。略画というのは日常です。「子供たちと遊びましょう」とか、「おいしいものを食べに行きましょう」というような思いですね。密画というのは専門で、それぞれ細かく研究していきます。

大森先生は、「密画だけやっていたらだめだ。また略画だけでも新しいことはできない。人間は密画と略画を重ね描きしながら、次のこと、また

その次のことをやっていって、さらに子供たちにもそういう形で伝えていくのだ」とおっしゃいました。偉い先生だって密画の部分の知識だけではだめ。先生として、人間として、子供たちに何かを渡す。そういう風にならないとうまくいかないのです。

これは機械論的世界観ではない、生命論的世界観です。大森先生は「世界観というものは単なる学問的認識ではない。学問的認識を含んでの全生活的なものである。自然をどう見るかにとどまらず、人間生活をどう見るか、そしてどう生活して行動するかを含んでワンセットになっている。そこには宗教、道徳、政治、商売、性、教育、司法、儀式、習俗、スポーツ、と人間生活のあらゆる面が含まれている」と言われます。「すべてを同じようにきちんと考えましょう」というのが、大森先生の言われる世界観です。カントが考えた、デカルトが言った、という話ではありません。誰でもみんな、「自分はどうか考えるか」ということをきちんと持ちましょうということです。その基盤には自分の日常と、お仕事にしていることの二つがあります。お仕事というのは、別にお金をもらっているお仕事でなくていいのです。子供を育てることもお仕事だし、家事もお仕事です。

本日皆様に申し上げたいことはこのようなことです。

ところで、最近コロナ禍と関係して、よく聞かれるものですから、ここだけ生物学者に戻しまして、ウイルスについてお話しておきたいと思います。コロナ禍のために、ウイルスを病原体としてだけ捉えて騒いでいるわけですが、実はウイルスというのはこういうものであるということ。を頭の中に入れていただくと、これまでお話ししてきたこととつながるかと思いますので。

ウイルスは生物か無生物かということをよく聞かれます。私はウイルスは「動く遺伝子」だと言っています。生きものはみんな細胞でできている。その中にDNAが遺伝子として入っている。実はこれまでの機械論的な考え方の中では、遺伝子はとても決定論的にとらえられています。よく「私の遺伝子」という言い方をなさいませんか。「ヒトの遺伝子」とか「私の遺伝子」、そんなものはありません。私の遺伝子もバクテリアの遺伝子も基本的には同じなのです。ただ遺伝子の組み合わせが違うのです。こう組み合わせると「バクテリア」になる、こうやると「ヒト」になる。

遺伝子を決定論的に考えると、「親がろくなものくれなかったから」とぼやく人がでてきますが、遺伝子は実はものすごく動いている。実は染色体の中でも、細胞の中でも遺伝子は動いているのですが、今日はそこは省略します。ウイルスは細胞の外に出た遺伝子です。DNAは外に出るととても壊れやすい。紫外線などで壊れますので、それだけでうろうろはできません。そこでタンパク質の殻を着て、あちこち動いている。ウイルスという存在が世界にあるということは、遺伝子が動いているということです。先に多様性のことを言いましたが、ウイルスという存在は、その多様な生きものがみんなつながっていることを示しているのです。

新型コロナウイルスは、コウモリの中にいれば何も悪いことをしなかった。それが人間に入ったら肺炎などを起こしたりするので大変です。これは押さえこまないといけません。

でもウイルスを撲滅できるかというと、これは無理。自然界の中に遺伝子が動くということがあって、動くという役割を果たしている。実は私たち哺乳類は赤ちゃんをお腹の中で育てるために胎盤がある。哺乳類に胎盤ができたとき、新しい

遺伝子が必要だったわけです。その遺伝子は実はウイルスが運びました。もしウイルスが運んでくれないければ胎盤はできなかった。哺乳類が存在しなかった。私たちもこんな風に存在していなかったかもしれません。

ですからウイルスは決して悪いことだけではありません。動く遺伝子として、「いるんだね」と思いながら、でも、悪さをしたときはワクチン対策をする。ワクチンづくりは世界で協力するのが有効ですのに、今は競争の時代なので協力不足です。このような時こそ世界中が協力しなければならないのに、今は競争しています。科学の世界でも協力ということがとても下手になりました。

今のウイルス問題の取り上げ方は機械論的です。そこでは人々が健康志向で清潔志向で、抗菌グッズと称するものを使っています。便利さを求め、人まかせなのです。そこへ「あなたがあなたの手を洗って身を守りなさい」とコロナが教えている。一人の人間としては「私が自分の身を守ります」という意識が大事。「菌やウイルスはどこにもあっちゃいけない」という〇×発想ではなく、コロナを、遺伝子決定論を見直すきっかけにすることが大事だと思っています。

最後に子供たちの教育を少し話します。福島県の喜多方市が私の発想した農業科を作ってくれました。田植えや稲刈りをする活動はよくやられています。喜多方のはそうではなく農業科です。農業科があるから1年中子供たちが畑のことを考える。それが大事です。その結果、喜多方の子供たちは本当に素晴らしくてとてもすてきな子供たちとして育っています。彼らは、自分たちが繋がりの中にあること、人とも、ほかの生きものとも繋がっていると感じている。文科省がおっしゃる「生きる力」って何だろうと私はこの子たちと接

しながら考えました。すてきな笑顔とか自ら考えて行動することとか。農業科をやってから子供たちが自分で考えるようになりました。交渉しないとうまくいかないし、うまく表現しないとだめです。すると作文がとっても上手になった。これこそが生きる力です。この力のことを教育の中でもよくお考えいただきたいと思いました。

最後に、なんでも今、論理でものを考えがちですね。論理だけで行くのだったらAIでいいのです。でも私たちはAIではなくて、藤井聡太君ですね、AIよりも藤井君でいきましょう。AIにはありませんが、藤井君には「思い」がありますよね。

そこで、私は「みんな生きものだ」となった時に、同時に皆さんの中に持っていただきたい、生きものだと思えばおのずと生まれるはずだと思っている気持ちが「愛づる」です。子供たちを愛づる。昔、「蟲愛づる姫君」という、私の大好きなお姫様がいらっしゃいました。これは「変わり者」だと言われたお姫様ですが、「本質を見ましよう」といって、小さな生きものたちを愛づることをなされた。



「私は生きものです」という意識をもち、世界観を変えませんか、教育もそこでなさっていただけませんか。その時に、全員の中にあってほしいの

が「愛づる」という気持です。これは、フィロソフィーの「フィロ」です。フィルハーモニーの「フィル」。フィルハーモニーだから音楽が好き、フィロソフィーだから知を愛します。そういう気持ち。「愛づる」という気持ちをみんなに対して、子供たちに対しても他の生きものに対しても持っていていただくと、今「忖度」と言われている教育とは違うことができるのではいか。専門ではない人が余計なことを申しますが、そんな風に思っています。ありがとうございました。

会場からの質問に答えて

質問 愛づるということについて。夫が蝶を標本にするのですが・・。

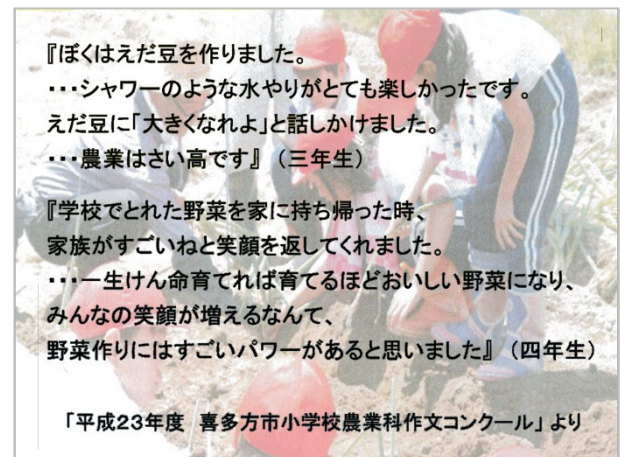
中村 生きものは、○か×かでいきません。愛づると言って全部きれいごとでいけばいいのですが、私たちはどこかで命を頂いている。標本というものも、子どもの教育の中でやはり必要です。私は、無駄な命は取らないでね、といっています。私たちが生きていく上で必要な命を頂く、「命を頂く」という言葉があります。○か×かでいかないというところで、お連れ合いと妥協なさって下さい(笑)。

質問 喜多方小学校のことについて教えてください。

中村 10年以上前のことですが、教育について考える重要な会議の中で、「これからの教育に必要なものは、コンピューターと英語である」と言われた方がいました。それは認めますが、「コンピューターを小学生に教えてどうするのですか」と伺いましたら、その方は、「例えば株の値であるとか・・」と言われましたので、「でも畑のカブのほうが子どもには良いのではないですか」とつい言ってしまいました(笑)。

それを日経新聞の方が聞いておられて、「そのこ

とを書いて下さい」というので書きましたら、喜多方市の市長さんがそれを読まれて、「やります!」ということになりました。そこから始まり10年ぐらいになります。喜多方市が困るくらいたくさんの見学者がみえて「いいことをやっていますね」とは言われるのですが、実施された市は他には一つもありません。喜多方市の教育委員会は素晴らしいです。教育委員会を良くするというのは大事なことです。



質問 ルネッサンスに関心がありますが、どのような本がありますか。

中村 藤原書店から全8巻の私のコレクションが出ています。その中に書いておりますので、お読みいただければと思います。

質問 ウイルスが人間の進歩を後退させていないかと思うのですが。

中村 バクテリアもウイルスもみな、人間より先に存在しているのですから、「お前たち、いてはいけない!」というわけにはいきませんので、そういうものがあるということを前提にして社会を創っていく。それが私たちのやることです。今、科学者が協力できていないことがとてもつらいですね。国と国との対立もあって協力できていませんので。お金にも繋がりますし、価値観の問題でもあります。このような時に協力ができる、そのようになってほしいと思っています。

パネルディスカッション 挨拶

一般社団法人 大学女性協会 副会長

2020 年度シンポジウム企画委員長 城倉 純子

コロナ禍の拡大が長引くにつれ、私たちはこれまでに経験したことのない現実を突きつけられ、唐突に感じられた小中学校一斉休校の措置や、自粛生活での疲れに戸惑い、不安に陥りました。今後、今まで通りの日常は戻るのだろうか、それとも大きな変化を余儀なくされるのだろうか、との焦りの中で、誰もが、何が大切で何が適切でなかったかを省みなければならないと思いました。この貴重な経験の意味を問い、それを無駄にせず、今後の生活の在りようを考えていきたいとの思いから、大学女性協会ではとくに重要ですべての問題に通底する「広い意味での教育」に焦点をあてて、パネルディスカッションを企画いたしました。

それでは、第二部のパネルディスカッションに入らせていただきます。中村桂子先生の基調講演の包括的なお話を受けて、教育の分野にテーマを絞り、「コロナ禍を契機にみえてきた教育の本質」というサブテーマに沿って、お話をお願いいたします。

本日は 3 名のパネリストの方々にお越しいただいております。それぞれの方からのプレゼンテーションのあと、基調講演者の中村桂子先生も交えて、4 名の皆さまでセッションをしていただきたいと思います。

パネリストの方々をご紹介します。お一人目は、中野真依さんです。中野さんは神奈川学園中学・高等学校の教諭をしておられます。その前は民間企業にかなり長く勤められていたそうです。民間企業から学校の教諭になられたということで、豊富な経験をお持ちでいらっしゃると思います。

お二人目は、本多さくらさんです。静岡県富士市のママさんサークル「ふじママサロン」で活動をなさっています。プロフィールに「技術士、メーカー研究員」と書かれてあるとおり、メーカーの研究所で、いま皆さまが着けておられるマスクの材料である不織布の研究をしておられます。そのお仕事の傍ら、子育て中でもあり、同じように子育てに励む静岡県富士市のママさんたちと一緒に活動をしておられます。アンケート調査の報告についてもお聞きできると思います。

三人目は、当協会の理事で、奈良支部の支部長でもある中道貞子会員です。現在、奈良女子大学国際交流センター客員センター員を務めながら、「生きものに学ぶ生物教育—生き物はすごい」を伝えることをライフワークに頑張っておられます。奈良女子大学附属中等教育学校の副校長も務められました。来月に予定している当協会主催の「J カフェ」でも講師をしていただきますので、そちらのほうも楽しみにしていただきたいと思います。

最後に中村桂子先生に、講評とシンポジウムのまとめをお願い致しております。

発表-1 コロナ禍における学校の状況と模索 ～一つの学校の挑戦～

神奈川学園中学・高等学校教諭 中野 真依

中野 真依と申します。私からは、学校現場ではこのコロナ禍の間にどのようなことをやってきたのかをお伝えしたいと思います。

私の話を始める前に、基調講演のことに触れたと思います。このコロナ禍を生命誌のパラダイムでとらえるという中村先生のお話にときめきました。「『このままじゃダメだぜ』とコロナが問いかけている」と冒頭におっしゃったことが、心に刺さりました。教育も今、世界観、言い換えればパラダイムの転換を求められていますが、コロナによって、このままではだめだということを、さらに突き付けられたこととなります。方法論も同時に転換しなければならないところにあるのが学校教育だと思いますので、これはまさに教育の進化の時であるということです。教育が歴史の流れの中でエボルブ、展開していくその過程を皆さんと共有した上で、どういう形で多様性を得ていくことができるのかを考える時だと思います。

それでは、私の自己紹介と勤務校の紹介をいたします。私の専門は物理で、理科を教えて7年目になります。勤務校の神奈川学園中学・高等学校は、横浜市の横浜駅近くにある私立の中高一貫の女子校です。各学年200名が在籍していて、全校生徒数は1200名、約120人の教員を擁する学校で、創立107年になります。

2020年のコロナ感染症拡大の中、その学校現場で私が経験した範囲内でのことをお話しし、限られた例にはなりますが、一つの学校の挑戦としてみていただきたいと思います。



はじめに、このコロナ禍の経過の中で学校生活にどのようなことが起こったかを時系列にそって概略をみてみますと、上図のようになります。

すでに2月初めには、大型クルーズ船ダイヤモンドプリンセス号が横浜港に寄港し、横浜ではコロナ禍の報道が大きく始まり、2月末には首相から全国の学校の春休み末までの休校要請があり、3月2日に一斉休校が始まりました。

新年度を迎えた4月7日には7都道府県を対象にした緊急事態宣言が出され、その後1か月間は学校の閉鎖ということで、全国の学校の64%で休校が決まりました。その後4月16日に緊急事態宣言が全国へおよび、学校の93%が休校することとなりました。それから1か月後の大型連休明けには学校が再開できるかと思いましたが、神奈川県を含む重点対策地域の29都道府県では5月末まで休校を延長し、全国の学校の86%が休校を継続しました。

5月25日緊急事態宣言の解除を受け、6月の初めには全国の98%の学校が授業を再開しました。ただし、私の勤務校のある神奈川県をはじめ特定

警戒都道府県では、時差通学や短縮授業、分散登校を実施する形での再開となり、全面再開は約50%にとどまりました。

このような状況を受けて、私立・公立の差もありますが、この時点で学校の所在する県や地域によって、学校教育の状態、学習の状態に、とても大きな差が出てきたことを、ご承知いただければと思います。インターネットの向こうでご覧いただいている皆さんの中には、ご自分の近くの学校とは違うなあと思われている方もおられると思います。学校とか学校教育というものに非常に差が開いたわけですが、これも今回のコロナ禍が引き起こしたものの一例です。

それでは次に、神奈川学園の対応について、先ず年度末の2月と3月、次に臨時休校中の4月と5月、そして学校が再開した6月以降と、大きく3段階に分けてご紹介します。

1. 年度末：2・3月

この時期に特筆すべきこととして次のようなことを経験しました。

- ・本校では、中高6年間の学校生活の中でも一番大きな行事といえる中学3年生全員参加のホームステイによる海外研修が行われてきました。3年間かけて周到な準備をしてきたにもかかわらず、2月の末には中止を決めました。そして、3月初めから休校となり、海外ホームステイどころか学校にすらまったく行けなくなってしまいました。
- ・学年末テストを中止せざるを得なくなり、学年末の評価は困難を極め、教員は休校中も勤務を継続して学年末の業務にあたりました。
- ・卒業式は、参加者を卒業生とその保護者のみに制限して実施し、何とか卒業生を送り出すことはできました。

- ・3月末の終業式のみを登校日とし、通知表を渡すなど短時間で式を完了しました。
- ・教員たちは春休み期間中、新学期に休校が続くことを見越して、生徒一人一人への教材を発送したり、評価を含めた学年末の業務をこなしたりしました。
- ・オンライン学習支援の必要性を認識していたので、春休み中に他の業務と並行して準備を進めました。私は情報部という校務分掌に所属していましたので、その役目として、パソコンが苦手な教員仲間を含めた全教員への研修を数回に分けて担いました。

このように、3月は生徒たちは学校に来ていませんでしたが、教師は毎日出勤して大忙しの日々を過ごしました

2. 休校期間：4・5月

3月の準備を経て、4月と5月は完全オンラインの形で新学期をスタートさせ、次のような方法と内容で授業を実施しました。

- ・4月初めには教科書を郵送し、4月末までには全校生徒に対して1人1台のノートパソコンChromebookが配備されました。
- ・5月には始業式を動画配信により挙行了しました。
- ・新中学1年生の入学式は、連休明けまで待った後にZoomのシステムを用いて動画配信で実施し、新入生が学校とつながる機会を持ちました。
- ・オンラインによる授業は、在宅勤務の保護者の技術援助といった家族の協力も得て運用されました。教員にとっては毎日が授業参観という緊張感もありましたが、ある意味で生徒の家族との距離が縮まる経験ともなりました。
- ・高校3年生と中学1年生に対しては、早めに重点的にGoogle MeetとZoomを用いて、毎日の朝礼とホームルームや面談をこまめに行い、さ

らにネット上でグループを編成し何気ない会話などを通して生徒同士の繋がりを図ることができるように工夫しました。

この間私たちが大切にしていたことは、心の距離を離さないこと、つまり生徒と教師の繋がり、特に生徒同士の繋がりでした。オンライン教育・学習を通して生徒たちに伝えたかったことは「離れていても繋がっている」ということです。私たちは信頼と安心が一番学習を支えると思っており、勉強そのものもさることながら、「安心感」を作ることに努めてきました。

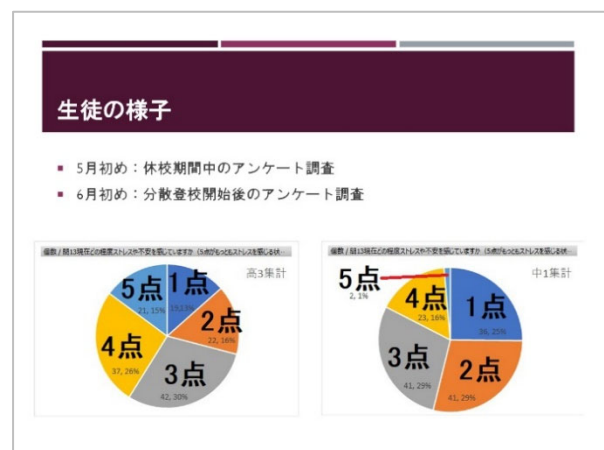
3. 分散登校・短縮授業：6・7月

6月になると登校が始まりましたが、密を避けるため次のような工夫を施しました。

- ・各学年週2日の登校とし、各クラスは人数を半分の20人にして、生徒間の距離を隔てました。
- ・授業中、とくに理科の実験時などは、アクリル板を用いて生徒間の接触を減らしました。
- ・通学時には朝夕のラッシュ時を避け、9時半始業で45分間の短縮授業にしました。
- ・登校しない日はオンライン学習を継続。
- ・1学期の期末テスト前には、毎日全員登校。
- ・2学期は、8月の最終週からスタート。
- ・文化祭、体育祭、宿泊行事などは今年度は中止。

生徒の様子について、休校期間中の5月に行ったアンケート調査の結果からみてみます。「現在の程度ストレスや不安を感じていますか」という質問に対する回答を示したのが右上の図で、5点よりもストレスを感じる状態を示しています。ストレス点が高い高校3年生は半分以上が受験の不安もあり授業に対して不安を訴えていました。一方、中学1年生では不安を示している生徒は少なく、割合にのんびりと過ごしていた時期でもあ

ったようでした。

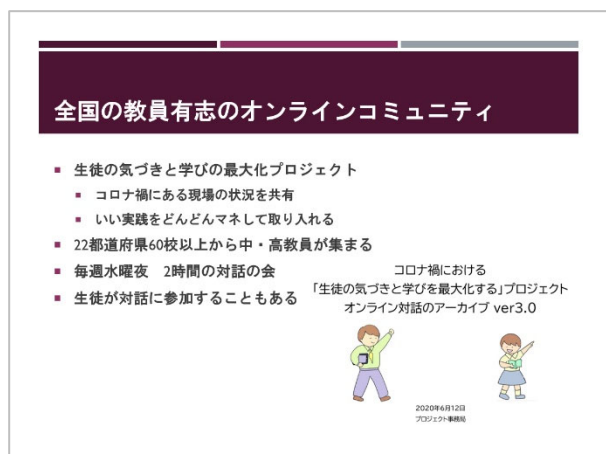


一方で教員の様子を示しているのが下図です。



教員の方はこの時期本当に忙しく過ごしておりました。不安や不満、疲労、孤独感などで苦しい中、それでも生徒のためにできることを頑張っていた、ということで少し頑張りすぎてしまったところもありましたが、新しい挑戦と併せて働き方を見直す機会になったかと思います。因みに通勤時間が無くなったことで睡眠時間が少し伸びて、顔色がよくなったり、健康的な生活を送ることができたりしました。

この時期は教員として様々な苦しさもありましたが、私は全国の教員有志のオンラインコミュニティ「生徒の気づきと学びを最大化する」プロジェクトに参加しました(次図)。全国の22都道府県60校以上から中・高の教員が毎週一回対話をしている会で、コロナ禍にある現状を共有し、いい実践に倣って取り入れることができる集まりです。



ここでコロナ禍における学校がどのような気づきを得たのかを、このプロジェクトの成果報告書（註）から引用してお伝えしたいと思います。

先ず私たちがこのコロナ禍の中で学んだことは、生徒は「教えられることから自分たちで学ぶということに気づいている」ということです。私たちは、教師として何もしなかったのではないか、教育者としては生徒に何かさせなければならないのではないか、との気持ちに駆られたものですが、生徒は生じたゆとりや体力の中で、「自分たちが本当に学びたいことは何だったのだろうか」「学校って何なのだろうか」を考える時間を得ていました。

教員も生徒もいろいろなチャレンジをしています。生徒は新しくできた時間の中で、自分の興味あることに挑戦して、例えばアプリケーションを作ったり、自分たちのオンライングループを作って活動したりするような人も生まれてきています。私たち教員も新しい学びの形を模索しました。正しい答えがない中で、生徒あるいは家庭と一緒にどういう形で生徒の学びを助けることができるか、と問いました。それまで「学校という場」が保っていた、教員と生徒、生徒と生徒の網の目のようなつながりがばらばらに断たれた状況からスタートせざるを得ませんでした。でもその結果、学び自体は教員と生徒とで共に求め合い、共に作っていくものだ、というところに立つきっかけをもら

ったような気がします。教員からの一方的な働きかけでは生徒の求めるものはわからなかっただろうと思います。それに加えて、生徒の中にも、オンラインと教室での授業とを併用して学びたいという人たちも出てきました。今は結局学校に戻ってきていますが、その人たちは、学び方には多様なやり方があり、自分に合ったものを選ぶのが良いのだ、ということに気づくことができました。

最後に、これからの課題について触れます。今は、「学ぶ」と「教える」が共に必要だということに気づいたところですが、自ら学ぶことができるかどうかという「自学力」は、もともと生徒ごとに大きな差があるものでした。そこに、コロナ禍で生徒間の繋がりが分断されたことからその差がさらに広がり、クローズアップされたように思います。しかしそれは、生徒の学ぶ力の有る無しに応じ、どうしたら学ぶ力が少ない子を育てていけるか、他方自ら学ぶ力が充分ある子にはさらに成長を促す課題をどのように与えたらよいかを問う、という形で学校現場の目標を個別に深化させたのではないかと思います。教員と生徒が支え合い、ご家庭の方々にも支えていただきながら共に少しずつ良い形へ進んでいく、というのがこれからの挑戦なのではないかと思っています。新しく学校の役割が問われている今だからこそ、どのようにしたら新しい学校の形、教員と生徒の関係を作っていけるのか、これこそ私たちがまだまだ追い続けなければならない目標だと考えています。今後とも生徒と教員の挑戦を応援いただければと思います。ありがとうございました。

（註）コロナ禍における「生徒の気づきと学びを最大化する」プロジェクト オンライン対話のアーカイブ ver3.0 (2020/06/12)
https://bhsso.benesse.ne.jp/hs_online/info/guide/project/

発表-2 コロナ禍を母親の視点から考える

静岡県富士市 ママさんサークル「ふじママサロン」 本多 さくら

本多さくらと申します。私は「コロナ禍を母親の視点から考える」というタイトルでお話させていただきます。

私自身、教育の現場にいるわけではなく、経験豊かな先生方や皆さまの前でお話しすることを大変おこがましく感じますが、ひとりの母親として今回考えたことをお話しさせていただきたいと思っています。

先ず初めに簡単に自己紹介をさせていただきます。静岡県富士市在住の、メーカーの研究員で、4才と7才、2人の女の子の母です。長女は小1になったばかりです。富士市の「ふじママサロン」という団体に活動しています。もう一つ、富士市の「おやこそだちの会」という団体でも活動しています。こちらは“親子で学ぶ”、“働くママ”をキーワードとする活動を行っています。

「ふじママサロン」の活動は、子育てに関わる方の「おしゃべりサロン」が主体です。対話から見えた課題を基に地域の子育て環境をより良いものにするための「仕掛け」を作ろうとしています。メンバーは、富士市の子育て関連活動の代表者と主宰者です。一つの団体ではできない横断的な企画を立てて社会的なテーマにアプローチしています。具体的には県議会議員の選挙の時に候補者に対して公開質問状を出すとか、市内の子どもたちがどんなことに興味があるかを知りたいというお母さんたちのためのイベントを行う、などのことです。

このイベントは昨年からはじめましたが、今年はコロナ禍でどうするか話し合い、オンラインでやろうということになりました。多くの団体の協力

を得て、結果的には4コマの講座を同時並行で流すなどのことを実施することができました。

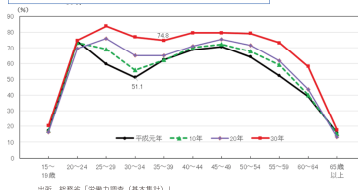
最初に子育て世代を取り巻く社会課題を、キーワードと共に紹介したいと思います。

子育て世代を取り巻く社会課題



M字カーブとは

女性の年齢階級別労働力率の推移（平成元年～30年）



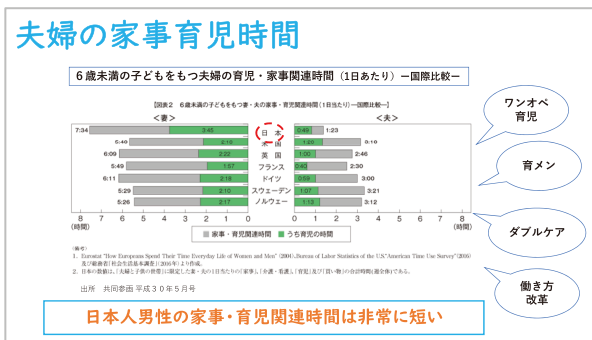
M字カーブは解消傾向⇒働く母親の増加

先ず初めに「M字カーブ」ですが、これは女性の年齢階級別労働力率の推移です。何才の時に女性のどのくらいの人たちが働いているかを表すものです。M字カーブが示すのは、ちょうど子育てをしている20代後半から30代後半くらいの女性の労働力率が非常に低下することで、グラフにするとMのような形になるので、M字カーブと呼ばれています。このM字カーブの現象は最近解消傾向にあります。それは働く母親が増加しているということを意味します。

今回コロナの問題を契機に、いろいろな家庭があることが見えてきましたが、はっきりしたのは働くお母さんたちが非常に多かったこと。そして、その働くお母さんたちの置かれた環境が一人一人非常に異なっている、ということでした。

例えば自営業で働くお母さんもいれば、会社員として働いている人もいる。在宅勤務が許可された人もいれば、現場に行かなければいけない仕事のお母さんもいた。コロナ禍によってこの家庭環境の違いはさらにあらわなものになりました。

次に夫婦の家事育児時間についてご紹介します。

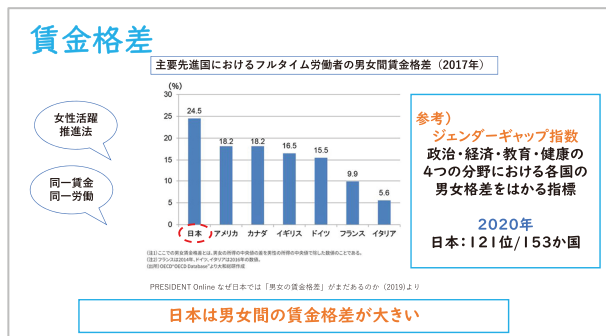


このグラフは6才未満の子どもを持つ夫婦の育児・家事関連時間を国際比較したものです。日本をみると、男性は女性に比べて家事育児にかかわる時間が非常に短いということが分かります。

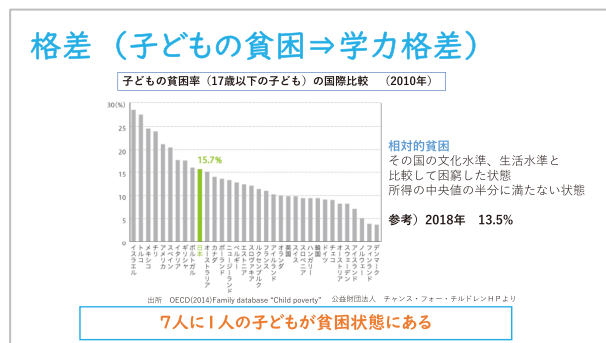
関連するキーワードを説明します。「ワンオペ育児」とは女性あるいは男性が一人で育児を担うこと、「育メン」とは育児に携わる男性のこと、「ダブルケア」とは子育てだけでなく介護も同時に担うことで、そのようなお母さんもいることを示しています。このような状況を打破して、できるだけみんなで子育てをしていこうという方向への「働き方改革」が今なされつつあると考えています。

次に賃金格差です。主要先進国におけるフルタイム労働者の男女間では賃金格差があります。特に日本の格差は非常に大きく、24.5%もの格差があります。ご参考までに世界経済フォーラムが出しているジェンダーギャップ指数をご紹介します。

ジェンダーギャップ指数とは、政治・経済・教育・健康の4つの分野における各国の男女格差を測る指標です。2020年の日本は153カ国中121位で、男女間格差が甚だしいことが示されています。



次は子どもの格差です。その国の文化水準や生活水準と比較して非常に困窮した状態が貧困ですが、平均所得の中央値の半分に満たない世帯のことを相対的貧困とよびます。日本は現在7人に1人の子どもが貧困状態にあると言われていますが、それはこの相対的貧困です。相対的貧困というのは、ご飯が食べられないとか、服が買えないといったことではありません。目に見える貧困ではなくて、見えにくいことが子供の格差の一つの問題でもあります。



子育て世代を取り巻く環境について簡単にまとめますと、働き続ける女性が非常に増加しているものの、男女間の家事育児時間や賃金の間にまだまだ大きな格差がある、というのが現実です。その上に、子どもの貧困があり、それが学力格差・教育格差へとつながります。このように子どもの中にも格差がある、というのが現実です。

今回データとしては紹介していませんが、孤独の“孤”と書いて「孤育て」、それから前出の「ワンオペ育児」に加え、「産後クライシス」というのがあります。これは出産後に夫婦仲が悪化し、

女性が一人で育児を抱え込んでしまい、子育ては皆で担うものであると気づけなくて、自分だけで頑張りすぎて悩むことです。このような女性が増えているということも一つの問題となっています。

子育て世代を取り巻く社会課題

- ◆ 働き続ける女性は増加も、男女間の家事・育児時間、賃金には大きな差がある。
⇒ 男女間の格差
- ◆ 子どもの貧困・学力格差・教育格差
⇒ 子どもの格差
- ◆ 孤育て・産後クライシス・ワンオペ
⇒ 子育てを1人で抱え込んでしまう環境

社会がこのような状況にある中で、今回コロナというものが私たち子育て世代を襲ったのでした。これまでも誰もがどうしたらよいか漠然とした不安や困難を抱えていたところに、さらにいろいろのことが肌で感じられるようになりました。2020年5月のはじめの頃ですが、私たち「ふじママサロン」は、隣の沼津市のPTAがオンライン学習実施の要望を出したという新聞記事を読みました。そこで富士市でも何かできることはないかと考え、アンケートを作成・実施することにしました。そしてその結果を集計し、市へアプローチをして教育委員会と市議会の議長さん、副議長さんと面談を行いました。その内容を以下にご紹介します。

まずコロナで学校が休校の間、子どもたちがどのように過ごしていたかについてです。「巣ごもり」という言葉も生まれたように、その頃は家の中にいた家族が多く、その様子は外からは非常に見えづらいものでした。

このアンケートを実施した背景には、私たち母親がLINEなどで繋がり、少しずつ関係を持ちつつ過ごしていた中で、「非常に不安です」とか「困ったよ」という声がたくさん出てきていたことがあります。一方では大変前向きなエネルギーや取

り組みも出てきていました。このように二つの方向性があったこと、それが今回のコロナの一つの特徴だと思います。

「富士市って素晴らしい」と思ったのですが、例えば「感染予防について訴えたい」という声が上がりました。また現役の大学生たちがオンラインの「おうち先生」という名前で授業を配信し始めました。子どもたち自身が子ども食堂を実施して、困っている子供たちにお昼ご飯を届けようという活動を行っていました。

私たちはこういう状況の中で、不平や不満を吸い上げるだけでなく、今後に繋がる前向きな意見も抽出しようと、アンケートを実施しました。

富士市内の休校中のアンケート

内容:
休校中の現在、不安なことや困っていること
休校延長や再休校の際にあると良いサポート
学校再開に際し、不安を感じていること
学校再開に際し、配慮があるとうれしいこと

期間:2020年5月10日~17日

対象:小学生の保護者
中学生本人または保護者

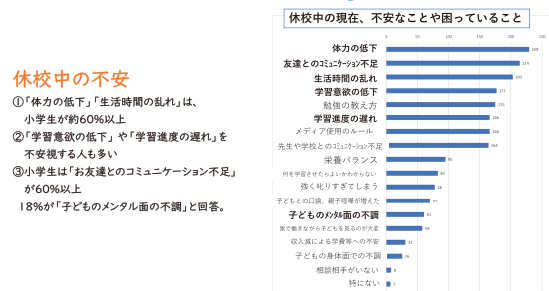
回答者数:425名
小学生 保護者 345名
中学生の保護者及び学生本人 80名

ふじママサロンの動き
5/6 沼津市PTAによるオンライン学習実施希望の記事を見て「富士でも何かできないかな?」
5/17~8 アンケート内容をつめる
5/19 アンケート作成とチェック
5/10~17 アンケート実施
5/18~20 アンケート集計と市へのアプローチ
5/21 教育委員会との面談
5/29 市議会議長・副議長との面談

アンケートから見えたことについてお話しします。

1. 休校中の不安としては、スライドのグラフにあるような項目を皆さんに問いました。

アンケートから見えたこと①



個人によって興味関心が異なりますので、結果をご覧になって共感を覚えられることはそれぞれに違うと思いますが、データの中から私が抽出したことについて紹介させていただきます。

- ① 「体力の低下」「生活時間の乱れ」を気にされている

の方が多く、小学生の保護者では60%以上でした。

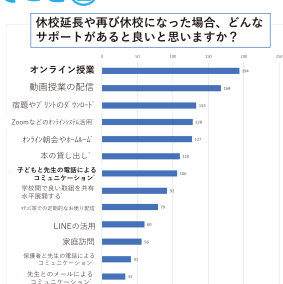
- ② 「学習意欲の低下」や「学習進度の遅れ」を不安視する方も多くみられました。
- ③ 小学生では「お友達とのコミュニケーション不足」を挙げている方も60%以上おられ、18%の方が「子どもにメンタル面の不調が出ている」と回答されました。
- ④ 少し気になったのは少数ながら、「相談相手がいない」と回答された方が出てきたことです。これは先ほどお話しした「孤独な中での子育て」をしている方が、実際に存在することの表れではないかと感じています。

2. 休校延長や再び休校になった場合に欲しいサポートとしては、「オンライン授業」があります。それから、「先生ともっとコミュニケーションを取りたい」という声も上がっていました。

アンケートから見えたこと②

休校延長や再び休校になった場合、あると良いサポート

- ①「オンライン授業」の希望者は、小学校57%、中学校70%
- ②オンラインになった場合、兄弟がいるなどハード面の不足を懸念する声も
- ③小学生は「先生と子どもの電話でのコミュニケーション」を3割が希望



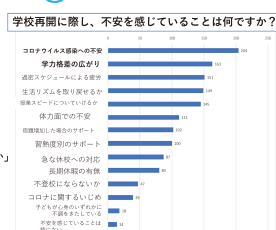
3. 学校再開に際しての不安については、

- ① 「コロナウィルスに感染するのではないかな」ととても多くありました。
- ② 「過密スケジュールによって疲労が溜まってしまっているのではないかな」という声も聞かれました。
- ③ 中学生は「学力格差の広がりへの不安」がトップでした。

アンケートから見えたこと③

学校再開への不安

- ①「新型コロナウイルス感染」は、小・中ともに約6割以上
- ②中学生は「学力格差の広がり」への不安がトップ
- ③「過密スケジュールによる疲労」「授業スピードについていけない」「生活リズムを取り戻せるか」を選択した人は、小・中ともに4割以上



4. 再開時に配慮してほしいこととしては、

- ① 「コロナへの衛生管理方法やルール」の公開、感染者が発生した場合の対応の周知をお願いしたい」という意見がたくさん出てきました。
- ② 行事や長期休暇の有無に関して、「早めのスケジュール共有」を求める声もありました。
- ③ 中学生では、「習熟度別サポート」や「補修日の設定」など、学習面のサポートを求める声が多くありました。

アンケートから見えたこと④

学校再開時の配慮

- ①「校内の衛生管理方法、ルールの公開」
- ②「感染者が発生した場合の対応の周知」
- ③「行事や長期休暇の有無に関して「早めのスケジュール共有」を求める声
- ④中学生は、「習熟度別サポート」「補修日の設定」など学習面の配慮を求める声が多い。



5. 自由記述では、「学校と家庭が連携して進めたい」という前向きな意見がたくさん出てきて、非常に嬉しく思いました。今回はかなり不満が溜まっていたと思われますが、そのような中でも先生方を配慮する声や、「一緒にやっていくのだ」という前向きな意見がたくさん見られました。そのことの意味は非常に大きかったと思います。あわせて、経済面の不安や疲労感もかなり溜まっているということが見受けられました。

アンケートから見えたこと⑤

自由意見より

- ・新型コロナウイルス対策は、**学校と家庭の共通認識**をつくり、子どもにも対策、指導を徹底
- ・学習や進度の遅れ、受験や進路選択に関する不安
- ・**詰め込み教育**によるメンタル面その他のケアがおろそかになること
- ・部活動、総合学習、行事の削減、人としての成長に関する機会
- ・休校中の**学校とのコミュニケーション** 相談や連絡手段の体制構築
- ・学校の先生方を配慮し、**学校と家庭が連携して進めたいという前向きな意見**が多数
- ・オンライン活用(双方向授業や動画配信、朝会やホームルームのみでも!)を求める声
- ・**経済面**の不安、「親の疲れも限界」など**親の疲弊**

この結果を受けて、教育委員会や市議会と話をしました。今回非常に感動したのは、教育委員会も市議会の人たちも、私たちのような市民団体の話に、とても真摯に耳を傾けてくれたことです。

感染対策については、「ガイドラインを示します」ということを教育委員会の方が話してくださいました。オンライン授業については、「児童一人に一台のタブレット配置に向けて前向きに取り組んでいます」ということを言っていただきました。

市議会の方でも、主要科目以外の学びの必要性を理解したうえで、「予算を付けます」という話をしてくださいましたし、市議会議員さんも、定例議会でこのアンケートを基にした一般質問をなさったりと、私たちのアンケートをととても参考にしてくださって市政に生かしてくださいました。

今回、市民の声が暮らしを変えるということに気づきました。

ところで私はこの期間をどのように過ごしていたかということをお話しします。子どもたちと一緒に公園に行くのも憚られる、というような時期もありましたが、それでも近くの公園や森に行ったり、一緒に料理を作ったりしました。それから、近所の子どもたちと一緒にオンラインで英語を勉強する取り組みをするなど、新しいことにもトライしました。

反省もあります。私自身もフルタイムで仕事をしていますので、時間を確保するために必死になりすぎてしまい、心の余裕がなくなり、子どもを強く叱り過ぎたこともあったことです。

もうひとつ、下の子（４歳）はそれまでテレビとかメディアに興味がなかったのですが、これを機に少しメディアに頼ってしまいました。下の子とメディアの付き合い方については、実は今でも少し悩んでいるところです。

最後に、いま私が考えていることについてお話しをさせていただきます。

コロナ禍のさなか、オンライン教育がなかなか進まない、ということがありました。その背景に、「学校は平等であるべき」、「他の人に対して不公

平であってはならない」という意識が非常に強かったことがあります。そのためにその方向への歩みが遅くなったのではないかと感じています。

「平等」ということと、「配慮」ということは違うと思います。ですからそのような機器を持っていない人に対しては何らか別の措置を講じるとか、他の面でサポートするなどのことを考えることが非常に重要だと思います。

もう一つ、学校と保護者が、そして地域が、どのように関わっていくべきなのかについても、今回、多くを考えさせられました。

今、急激に教育環境が変わりつつあるように感じます。私も日々忙しくしており、その中で思考が停止してしまっていたかもしれない、というようなことに、今回のコロナの問題を契機に、気づかされました。「自粛せよ」と言われた時に、「何を自粛するのか」、「どこまで自粛すればよいのか」など、そのようなことを自分できちんと考えて決められるだろうか、「私は本当に考えるということをやらなければいけないのだ」ということに、改めて気づかされたように思います。

学校は、これからもどんどん変わっていくものだと思いますが、今後も学校というのは「生きる力を養う場」だと思っています。教育というのは、家庭での教育も学校での教育も含めて、生きる力を養うこと、それは自分で夢を見つけて、それに向かって頑張る力、困難に出会ってもしなやかに対応する力、だと思います。「学校がこう言うからそうしなければならない」、「宿題が出ているからやらなければならない」というように思考を止めてしまうのではなく、「これは何のためにやるのかな」ということを親子で考えて、そこで気づいたことを社会に対して声を上げ続けていく、ということ、今後ともしていきたいと考えています。

ご清聴ありがとうございました。

※ 詳しい図は以下の URL 参照

<https://jauw.org/aboutjauw/books/archives/2020symp/2020honda.pdf>

発表-3 気づきから変容へ

～コロナ禍だからこそ活かそう 新学習指導要領の視点～

元奈良女子大学附属中等教育学校 副校長

奈良女子大学国際交流センター客員センター員

大学女性協会 奈良支部会員

中道 貞子

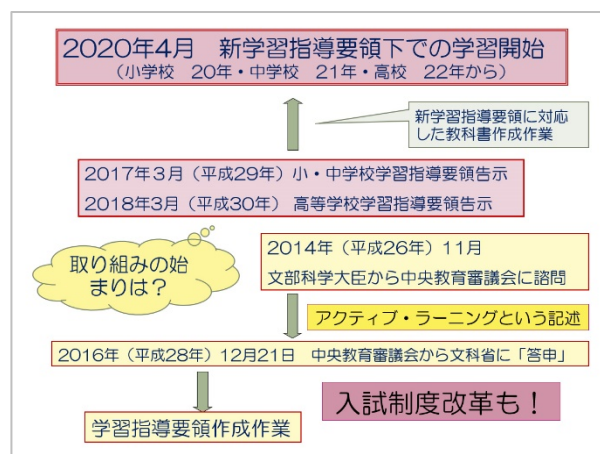
私は、1947 年生まれの団塊の世代です。奈良女子大学理学部生物学科で学び、1969 年に卒業しました。京都での教員生活を経て、奈良女子大学附属中等教育学校(元奈良女子大学文学部附属中・高校)で 30 年間理科を教え、その後 5 年間の副校長職を経て退職しました。私のライフワークは「生きものに学ぶ生物教育」であり、今も生物教育に関わる活動を続けています。

また、1990 年代は環境教育にも深くかかわっていましたし、2002 年から今に至るまで、アフガニスタンの教育にもかかわっています。2018 年に大学女性協会に入会し、今はその理事・奈良支部長としての仕事に携わっています。

初等中等教育に目を向けると、2020 年度から、小学校では新しい学習指導要領下で作成された教科書を用いた学習が始まりました。中学校では 2021 年度から、高校では 2022 年度から、新学習指導要領による学習が始まります。

まずは、学習指導要領がどのように作成されるのかを紹介します。取り組みの始まりは、文部科学省(以下、文科省)から、中央教育審議会(以下、中教審)という文部科学大臣の諮問機関への諮問です。中教審の初等中等教育分科会は、大学教授、初等中等教育学校校長や教育委員長、PTA 会長、市長、会社社長やジャーナリストなど多彩なメンバーで構成されています。

2014 年 11 月、この分科会に出された「初等中



等教育における教育課程の基準等の在り方について」という諮問書の中に「アクティブ・ラーニング」という記述が 4 か所にわたってみられたことから、「アクティブ・ラーニング」に注目が集まり、関連書籍が数多く出版されたり、関連した研修会はすぐに定員に達したりと、アクティブラーニングフィーバーとも言える現象が起きました。

2016 年 12 月、中教審から文部科学大臣に、審議結果をまとめた答申が提出されました。それを受けて、文科省内で、学習指導要領作成作業が始まりました。2017 年 3 月に小・中学校学習指導要領¹⁾、2018 年 3 月に高等学校学習指導要領¹⁾が告示されました。文科省からは、少し遅れて各教科の詳しい「解説等」が出されます。ちなみに、私は 2008 年に告示された中学校学習指導要領理科編作成協力者の一人でした。

学習指導要領が告示されると、教科書出版社では、その学習指導要領に対応した教科書の作成作業が始まります。日本では、文科省による教科書

検定制度があり、告示後、教科書発行までには、2～3年の年月を要します。検定を通った教科書はまず、見本本として年度の初めごろに教育委員会や各学校に届けられ、どの教科書を採択するかの検討がなされるので、新しい教科書を使つての学習が始まるまでには、さらに1年を要します。

今回の改訂では、時を同じくして大学入試改革も行われようとしています。いくら高校の学習指導要領が新しい視点を取り入れたものになっても、大学入試が旧態然としたものでは、高校教育のスタイルは変わらないという考えもあつてのことと思います。しかし、その大きな目玉であつた「英語の民間試験の活用」「国語や数学における記述式問題の導入」の延期が発表されたことはご存じの方も多いことでしょう。

2015年8月、諮問から答申までの途中段階で、中教審初等中等教育分科会教育課程企画特別部会から「論点整理」について報告²⁾がありました。55ページからなる報告は「1. 2030年の社会と子供たちの未来」という内容から始まります。

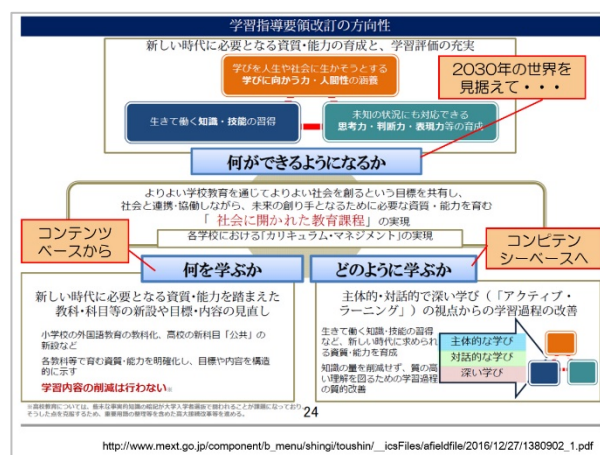
その中で「2030年の社会と、そして更にその先の豊かな未来を築くために、教育課程を通じて初等中等教育が果たすべき役割を示す。」「学校を、変化する社会の中に位置付け、教育課程全体を体系化する。」と述べられています。

では、変化する社会とはどんな社会なのでしょう。か？「Society 5.0」という言葉をよく聞きます。内閣府のウェブサイト³⁾には「サイバー空間(仮想空間)とフィジカル空間(現実空間)を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会(Society)」との記述があります。すでに、いろいろなロボットが登場していますし、AI (Artificial Intelligence 人工知能)・ビッグデータ・VR (Virtual Reality 仮想現実)・IoT (Internet of Things モノのインタ

ーネット)などといった言葉が飛び交っています。こうした最新技術を駆使した社会が、さらに広がっていくのかもしれませんが。

一方、「論点整理」の補足資料の中には、人口の推移と将来の人口や生産年齢人口の推移に関する予測データが示されています。日本が超高齢化社会に入っていくことも忘れてはならない視点です。

さらに世界に目を向けてみると、多くの課題が山積しています。2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された目標は、SDGsとよばれ、近年、いろいろなところで目にしたり、話題にのぼったりしています。その中には17のゴールが取り上げられており、前文では「地球上の誰一人取り残さないことを誓う」と述べられています。これらの目標を達成することは非常に難しいことです。でも、私たちは自分の目が届く小さな世界だけで生きていけるわけではなく、見えないながらもいろいろな人や物が深いつながりをもっている中で生きています。今後ますます、広い視野に立って考え、行動していくことが必要になるでしょう。2030年代以後の社会を担う子供たちにどんな力をつけるべきかをしっかりと考えた上での教育が必要なことは言うまでもありません。



上図は、2016年に中教審から文科省に提出された答申概要の中に示されている図です⁴⁾。これまで

の学習指導要領では、主として「何を学ぶか」が示されていましたが、今回の学習指導要領では「どのように学ぶか」にも重点が置かれています。それは、コンテンツベースからコンピテンシーベースへの転換とも言えるものです。その中には、ともすれば言葉だけが独り歩きを始めた「アクティブ・ラーニング」という用語に変わって「主体的・対話的で深い学び」という言葉が使われています。同時に「何ができるようになるか」にも重点が置かれています。これは、2030年代を生きる子供たちが、未来社会の中で生きていくのに必要な要素を表しているとも言えます。

以上述べてきたことは、「Teaching から Learning へのパラダイムシフト」が求められているということではないでしょうか？新学習指導要領のもとでの2020年度からの学習は、そんな大きな教育の変換期の始まりのはずでした。

さて、そんな中で起こったのが、COVID-19 パンデミックです。初めころは「お湯を飲むと予防に効果がある」など、とんでもない情報も流布しました。総務省情報流通調査⁵⁾ (2020年6月)の「こまめに水を飲むと新型コロナウイルス予防に効果がある」という項目への回答は、「正しい情報だと思った・情報を信じた」「正しい情報かどうかかわらなかった」「正しい情報ではないと思った・情報を信じなかった」がそれぞれ約3分の1ずつとなっています。また、「年代別で見ると、若い年代ほど共有・拡散経験が高い傾向が見られた」と報告されています。8月4日、吉村大阪府知事が「ポピドンヨード含有うがい薬に、新型コロナウイルス減少効果が期待できる」と発言したとたんに、私が住む宇治市でさえも、ドラッグストアからうがい薬が消えました。何が正しい情報かをしっかり見極める目を養うことも、これからの子供

たちに必要な能力と言えるでしょう。

コロナ禍での初等中等教育学校

2月27日 安倍首相による「小中高の3月2日からの臨時休校」要請
3月 2日 全国一斉休校措置
4月16日 緊急事態宣言全国に拡大
5月25日 緊急事態宣言解除

～ 臨時休業の実施状況(5月11日時点) 文科省 ～

5月末まで休業(6月1日再開) 29都道府県

5月中下旬まで休業 9県

5月11日時点で再開 7県

当面休校を延長 2県

https://www.mext.go.jp/content/20200513_mxt_kouhou02-000006590_2.pdf

次に、コロナ禍での初等中等教育学校に対する政府・文科省の対応を見ていきます。上図に示すように、2月27日、安倍首相から「小中高の3月2日からの臨時休校」要請が出され、3月に入ると、全国一斉休校措置がはじまりました。4月16日には緊急事態宣言が全国に拡大し、宣言解除が出されたのは5月25日でした。文科省による臨時休業の実施状況⁶⁾ (5月11日時点)では、5月末までの休業(6月1日再開)が29都道府県、5月中下旬まで休業が9県、11日時点で再開が7県、当面休校を延長が2県となっていました。

学校が再開されて間もない6月5日、文科省は「学びの保障」に関する施策⁷⁾を発表、12日にはフォーラムが開催され、その資料⁸⁾が公開されています。新型コロナウイルス感染症対策に伴う児童生徒の「学びの保障」総合対策パッケージの中には、「子供たちの『学びの保障』に関する基本的な考え方」「文部科学省の『学びの保障』のための支援策」が示されており、フォーラム資料の中にあるQ&Aの最初の問いは「2か月も休校して、本当に学習は間に合うの?」「学校の授業内容を削らないと終わらないのでは?」です。「まずは・・・」と提示されている説明の中には「土曜日の活用、夏・冬休み等の見直し」「学校行事の重点化や準備時間の縮減」などが挙げられています(次頁図)。

文科省のメッセージ：新型コロナウイルス感染症に対応した子供たちの「学びの保障」に向けて（2020年6月12日）
文科省初等中等教育局長 丸山洋司

「学びの保障」総合対策パッケージ
*子供たちの「学びの保障」に関する基本的な考え方
*文部科学省の「学びの保障」のための支援策

Q 2カ月も休校して、本当に学習は間に合うの？

Q 学校の授業内容を削らないと終わらないのでは？

A あらゆる手段を活用して、今年度の学びを取り戻すため、文部科学省として全力でサポートします

A まずは授業時間の確保、その上で、

① 登校日の設定

② 分散登校の実施

③ 時間割編成の工夫

④ 土曜日の活用

⑤ 学校行事の重点化や学習時間の確保

...などにより、学校における指導を充実

https://www.mext.go.jp/content/20200611-mxt_syoto01-000007788_1.pdf

文科省があれだけ力を入れて喧伝してきた「主体的・対話的で深い学び」に関してはどこにも記述がありません。学習すべき内容をいかに消化するかというコンテンツベースの考え方にもとづいた方策のみに注目しているのではないかと思います。もし、これからの教育で大事なことは「どのように学ぶか」であり、「何ができるようにするか」をしっかりと考える機会にしようというメッセージが出されていたら、もっと違った方向に向かえたのではないのでしょうか？

次に、こうした状況の中でも、いろいろな新しい取り組みをしてきた国公立学校の例を紹介したいと思います。

下図は、元勤務校の北尾悟副校長による「第60回快適性・健康を考えるシンポジウム」での事例紹介資料からの抜粋です。一斉臨時休校の開始時

には課題を各家庭に郵送することから始まり、緊急事態宣言が出されたころにはオンライン学習が開始されています。5月10日にはZoom利用によるオンライン入学式が挙行され、その後は、時間割にもとづくオンライン学習が実施されました。ICT環境未整備の家庭には端末・レンタルWi-Fiの貸し出しを行ったり、奈良県教育委員会が環境整備を行ったクラウドプラットフォームを活用したりのオンライン・オンデマンドによる授業を実施するとともに、養護教諭のレンタルケータイを用いた教育相談窓口も開かれています。6月に入り、学校再開と共に、「感染レベルに基づく学習スタイル」を作成し、その指針に沿って、分散登校（半数はMeetによる同時配信）から、全員登校へと段階的に学習スタイルが進められています。

4月末、「学校休止中の『生徒の気づきと学びの最大化』プロジェクト」があることを知りました。ウェブサイトを見ると、生徒の気づきと学びを最大限にしていくために何が必要かの議論が行われており、4月20日付のオンライン対話のアーカイブ⁹⁾には、下図に示す順番に進めることが推奨されていました。このプロジェクトメンバーの中に中野真依さんの名前を見つけ、本シンポジウムのパネリストを依頼したという経緯もあります。

このプロジェクトは、ベネッセ（教育総合研究所）が事務局として運営協力しているものであり、

生徒の安全を守ることと生徒の学びを止めないこと
(奈良女子大学附属中等教育学校 北尾悟副校長作成資料より抜粋)

I期 3/2月～4/7火 一斉臨時休校と郵送課題の実施

II期 4/8水～5/8金 緊急事態宣言とオンライン学習の開始
各家庭に在宅でのオンライン学習が可能になる環境整備への協力依頼

5/10(日) オンライン入学式(Zoom利用)

III期 5/11月～5/28土 時間割に基づくオンライン学習の実施(休校延長)
家庭のICT環境調査⇒未整備の家庭(約70)に、端末・レンタルWi-Fi貸出
奈良県教育委員会「G-SUITE for Education」への参画、活用
(県内国公立学校すべての教職員と児童生徒が共通のクラウドプラットフォームで学ぶ環境の整備)

「課題配信」オンライン、オンデマンドによる授業の実施
オンラインによる「朝の会」や「ホームルーム」実施
時間割に基づく授業開始
(1～4年 午前3時間授業 5～6年 午後4時間授業)
教育相談窓口(養護教諭のレンタルケータイの契約)

IV期 6/1月～ 学校再開と「感染レベルに基づく学習スタイル」の作成

6/1月～6/5金 オンライン授業継続・学年別登校日設定

6/8月～6/12金 感染防止対策にもとづく学校再開
(分散登校 半数はMeetによる同時配信)

6/15月～ 全員登校へ(時差登校・短縮授業・当初部活禁止)

STEP1 休校中のマインドセットを教員間で共有する

STEP2 学校(学年・個人)としての学習支援の方針を定める

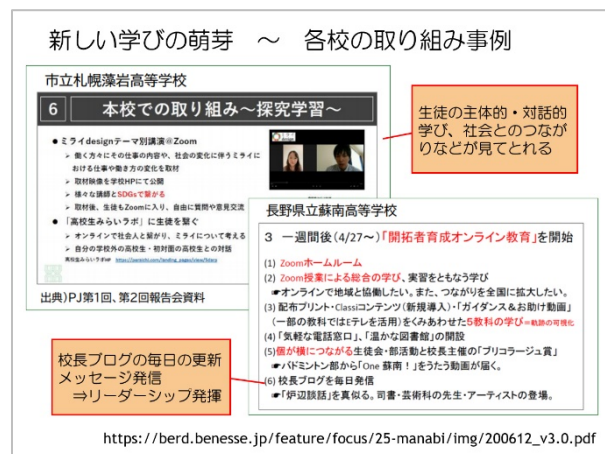
STEP3 活用するデジタルツール、ルール、教材等を決定し、準備する

STEP4 学習支援の方針を生徒・保護者に共有する

STEP5 学習支援を開始し、継続的に改善する

STEP6 学校再開後に実現したい新しい学校の姿を検討する

全国約 60 校の教員によるその取り組みは、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトにて随時報告が上がっています。その中で私が興味を持った例¹⁰⁾を二つ紹介します。



一つは、市立札幌藻岩高校の例で、探究学習が紹介されています。都市部の進学校による地域との連携にスポットを当てた取り組みがなされており、コロナ禍拡大で授業時間数の大幅減少の中でも、コロナ禍に起因する地域課題に着目させる形で、迅速に軌道修正を図ったといえます。

もう一つは、長野県立蘇南高校の例。校長ブログが毎日更新され、その中でしっかりとしたリーダーシップを発揮して学校のあるべき姿を伝え、実現されています。例えば、10月6日のブログは「生徒の授業評価をもとにした教員面談」というタイトルで、「多くの教員に共通した課題は、いかに生徒の対話的な学びを実現していくか、いかに深い学びを実現していくかである」と書かれており、新学習指導要領の意図するところを、教員一丸となって具現化しようとされていることを伺い知ることができます。

私学については、6月28日に開催された東京都生物教育研究会の研修会で紹介された2つの事例を紹介します。

新渡戸文化中学・高校の山藤旅聞氏（総括校長補佐/高等学校教育デザイナー）からは「今だから

こそスローに～生徒の『やりたい』を引き出す～」というテーマで、学校全体でカリキュラムについて検討していることの紹介がありました。「安心の場 双方向性重視 やり直しできる」という大前提(居場所)のもと、「自分で考えて・判断して・仲間と共に・行動する」を最上位目標とし、4つの要素を設定して、それぞれに含まれる内容を検討しているという発表でした。

また、同校の奥津憲人氏（ラーニングテクノロジーデザイナー）からは、オンラインの取り組み紹介もありました。授業で目指す大前提として「探究力」「科学的思考力」「学俗接近」というキーワードの説明があり、その実践例として、クロスカリキュラムの取り組み紹介がありました。また、家庭にあるものを使った実験の紹介や、学習内容の精選についての具体的事例紹介もありました。

三田国際学園中・高校の大野智久氏からは、「わかりやすく丁寧に教える 与えられるものを習う」から「生徒の学びを支援する 主体的・対話的に学ぶ」への転換をすることの必要性の説明がありました。大野氏は、2022年から施行の高等学校学習指導要領解説理科作成協力者のお一人でもあります。『授業時間外の活動』をうまくデザイン」「コンテンツは『必要最低限』に」「『ワクワク感』と『学び方』で自走可能」とまとめられました。

高校理科学科目のひとつである「科学と人間生活」の教科書(実教出版)のはじめのページには、「世の中に？と！があればほかに何もいらぬ」という詩人まど・みちおの100歳の時の言葉を引いて以下のように書かれています。

何もいらぬとまでは言えなくとも「？」（ふしぎに思ひ問いを立てること）と「！」（驚いたり、すばらしいと感激すること）が私たちの人生を豊かにすることは確かです。

科学は、考えることで「？」と「！」をつなぎます。豊かな人生にするために問いを立て、考え、驚きを手にしましょう。

「？」と「！」を引用し、これからの教育に求められることとして、私は3つのことを挙げたいと思います。

＊生徒自らがしっかり身の回りを見つめ、関心を持ったり、疑問をもったりすること

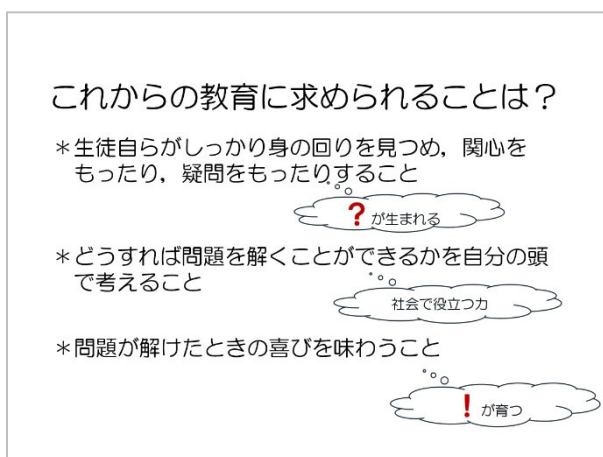
⇒「？」が生まれます。

＊どうすれば問題を解くことができるかを自分の頭で考えること

⇒社会で役立つ力が身につきます。

＊問題が解けたときの喜びを味わうこと

⇒「！」が育ちます。



新しい学習指導要領下での学習が始まるまさにその年、COVID-19 パンデミックが起きました。授業が再開されると、従来通りの教育スタイルに戻そうとしている学校もあるとも聞いています。コロナ禍を契機に、今だからこそ、「未来を担う子供たちのために必要な教育とは？」を一人ひとりが考え、みんなで議論し、気づきを変容にしていくことが大切なのではないのでしょうか。

※ 詳しい図は以下の URL 参照

<https://jauw.org/aboutjauw/books/archives/2020symp/2020nakamichi.pdf>

参考資料（掲載ウェブサイト URL）

1) 平成 29・30 年改訂学習指導要領、解説等

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm

2) 教育課程企画特別部会における論点際理について(報告)

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/053/sonota/1361117.htm

3) Society 5.0

https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/

4) 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について(答申)【概要】

https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/12/27/1380902_1.pdf

5) 総務省情報流通調査

https://www.soumu.go.jp/main_content/000693280.pdf

6) 新型コロナウイルス感染症対策のための学校における臨時休業の実施状況について

https://www.mext.go.jp/content/20200513-mxt_kouhou02-000006590_2.pdf

7) 子供たちの「学びの保障」

https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/1411020_00004.html

8) 新型コロナウイルス感染症に対応した子供たちの「学びの保障」に向けて

https://www.mext.go.jp/content/20200611-mxt_syoto01-000007788_1.pdf

9) 「生徒の気づきと学び」を最大化するプロジェクト オンライン対話のアーカイブ(Ver2. 2)

https://berd.benesse.jp/feature/focus/25-manabi/img/200601_v2_2.pdf

10) 「生徒の気づきと学び」を最大化するプロジェクト オンライン対話のアーカイブ(Ver3. 0)

https://berd.benesse.jp/feature/focus/25-manabi/img/200612_v3.0.pdf

パネルディスカッション

コーディネーター	城倉 純子
パネリスト	中野 真依
	本多 さくら
	中道 貞子
コメンテーター	中村 桂子

城倉 3人のパネリストの方々にお説を展開して頂き、ありがとうございました。これからはまたお一人5分間ほど、お話を伺いたいと思います。

中野さんからお願いいたします。先ほどのお話には、教員と生徒や、生徒同士のつながりがあることで「安心感」が作られていったということができてきました。「安心感」を作りだそうとご苦心をなさった様子がよく分かりました。また全国規模の教員有志の集まりに入られたということで、その中でご自分も学ばれたことがたくさんありだったそうですね。それらのことを含めて、5分程度で先ほどは伝えきれなかったことなどを補足していただけないでしょうか。

中野 学校が臨時休校になった時、生徒も教員も、「学校って何のためにあるのだろう」ということを考えさせられました。とくに生徒は、学校に来られなくなってみて、「友達に会いたい」、「先生たちに悩みを話したい」という気持ちに気づきました。結局学校とは、授業をやるだけのところではなくて、先生と、生徒と、またはいろんなものとのつながりを作ることができる場所なのだ、それが学校の価値なのだ、ということにみんな改めて気づきました。そのことは私たち教員は感覚としては持っていたのですが、改めて、「やっぱり学校ってそうなんだ」ということがわかりました。そこでZoomやMeetを使ってつながっていきということが、各学年の共通の目標になったわけです。

教員も実はすごく孤独で、家にいると他の大人

としゃべる時間が全然なくて、とても辛かったです。先ほどご紹介した、全国の教員がつながって語り合うという仕組みのグループですが、同じ学校の教員にはなかなか言えなくても、「こういうことが辛いんです」と言える。するとたとえば北海道の先生が、「ああ、私も同じです」と返される。こんな風に、むしろ同じ悩みを抱えている先生や生徒がこんなにたくさんいるからこそ、私たちが頑張ろう、という学びができた経験でした。つながりによって私たちはやる気がでたり、学ぶことができたりします。それは大人だけではなく、生徒も同様だということもわかりました。

先ほど本多さんのご発表に「家庭も一緒にやりたいのだ」というお話がありましたが、これはとても心強いことです。

学校でできることはたかが知れています。学校が教えることでできることにはやはり限界があります。そこで、ではどうしたら生徒は学びたい気持ちになれるのか、どうしたらそれを支えてあげられるのか、それには言語化し形にしていこうということが必要だ、という、とても大きなことが私たちにはわかったのです。ですから是非つながりを大事にしていきたいですし、それは生徒にとってもよいチャンスではないかと思います。「生きる力」をどうやって育ててゆくのかが、今問われていることなのだろうと思っています。

学校教育も、文科省から言われたからやるということではなく、目の前にいる生徒のために何ができるのかを考えてゆきたいです。

コロナ禍の中では、今まで授業をやっていたときと同じような学びができたわけではなかったのですが、生徒は何もしていなかったわけではありません。こういう状況だからこそできた学びもありました。

では私たちは生徒が自分で学びたいと思ってやったことに対してどうやって評価したらいいのか、という新しい課題も見つけることができました。

実はこれは今までの学校の中でもあったものでした。集団で一斉にやっているときには、それはなかなかとりだして、個々に見ることができないままになっていたものでした。

「本当の意味で個別に対応することとはどんなことなのか」、「一人ひとりの学ぶ力の違いを支えていくとはどういうことなのか」、「もしかしたら一人で勉強をすることができる子は自分でインターネットを通じて勉強してもよいのではないか」。これは結構可能なのです。そうすると教員はこの時間を自分だけでは学べない子に回すことができます。私たちも、「教え方って一様でいいのか」とずっと思っていましたので、コロナ禍はその問題によりやく形を与えて試すことができた時期だったと思います。

私たちは授業が始まれば日常に巻き込まれていってしまいます。でも、もともとあって、コロナ禍のなかで引き出された、生徒一人ひとりにどう対応していくのか、という課題、これは忘れることなく、向き合っていきたいと思います。とても大変ですけど。

城倉 ありがとうございます。「学校って、教科を学ぶだけのところではない、つながりを作るところなのだ」ということが改めて私たちにもわかりました。

次に本多さんには、先ほどふじママサロンのご紹介をしていただきましたが、地域への仕掛けも

作っておられるとのことですので、事例も含めてもう少し具体的に教えてください。

本多 私が今、このような活動をするきっかけとなったのはある上司の言葉でした。私の会社は全国各地に工場があり、その上司は娘さんが高校時代にある地方に住んでおられました。「地方は東京とは違って刺激が少なく、娘の視野を広げてあげることができなかったのも、後悔している」ということを懇親会の席でおっしゃったのです。それがとても心に引っかかりました。「親の仕事のせいで子どもの可能性を狭めてしまうことはしたくない」と思いました。

子どもと接していると、親が与えることのできる影響は限られていると感じます。母親の私が言うことより、友達や先生に言われることのほうが、娘にとって響くケースがたくさんあります。

私の場合はファミリーサポートを利用しており、私と夫の帰りが遅くなるときには、その人に迎えに行ってもらい、預かっただいています。子どもから、「こういうふうには遊んでもらって楽しかったからこういうふうにやりたい」などの話を聞くと、自分一人では子育てはできないことに気づきます。自分の子どもの環境を良くするためには、地域全体に対してアプローチする必要があるのです。それが巡り巡って自分にとっても子どもにとっても、良い影響を与えてくれるのです。そのような思いから、たくさん子どもたちに色々な機会をあたえ、色々な世界を知ってもらいたいと思って活動しています。具体的に今年やろうと計画しているのは、子どもと一緒にSDGsをカードゲームで学ぶということです。

次に子育てと夫の協力ということについて、我が家の事例を紹介します。夫は工場で仕事しています。24時間動いているマシンの管理をしているので、何かトラブルがあればすぐに行かなければ

なりません。

はじめて子どもが産まれた時、夫は「みんなが頑張っているのに、自分だけ休んだりはやできないよ」、「まわりに奥さんが働いている人がいないからわからないよ」と言っていました。でも子どもが大きくなるにつれて、少しずつ協力的になってきました。いまは一緒に子育てをしていると感じています。「会社を休むことなんてできない」と言っていた夫ですが、コロナで休校になったときは、「こういう事情で学校が休校なので、妻と休みを取りながら子どもをみます」と会社にメールで連絡をとり、ちゃんと休みを取っていたのです。

男性は女性よりも大義名分があったほうが会社に対して希望を言いやすいのではないかと、今回気づきました。働き方改革と言われていますが、国や行政からトップダウンで、こうしなさいと言われることで、男性も休みが取りやすくなるのではないかと思います。

今回、アンケートを採ったところ、富士宮でも別の団体が、アンケートを採ることになりました。活動はこうに波及していくのですね。富士宮のアンケートでは、「良かったこと」の中に、「コロナ禍で家族とのコミュニケーションが増えた」という回答がありました。コロナ禍で人々の価値観が変わり、今までなかなか進まなかった働き方改革がこれから少しずつ進んでいくのではないかと感じています。

最後をお願いします。子育てには地域の皆さんの協力が不可欠です。もし赤ちゃんを抱えている人がいたら、ちょっとでもいいですから、ドアを開けてあげるとか、「あら、かわいいわね」でもいいし、声をかけてあげてほしいのです。もしかしたらその人は、そのときその一日でその会話しかしていないかも知れないのです。ですので、ちょっと勇気を出して周りのお子さん連れの方に声をかけてあげていただけると嬉しいです。

城倉 呼び出されればいつでも仕事に出かけなければならないというように、仕事に縛られていたのが、コロナ禍がきっかけで、家族で過ごす時間が見つかったということですね。今回のアンケートの中にもあった、「家族の会話の時間が増えた」というのは素晴らしいことだと思います。

電車の中にベビーカーを入れて乗っていると、おじさんが「迷惑だ」みたいなことを言ってくる世の中ですが、そのようなことがなくなるように皆で子どもを大切に育ててゆきたいですね。

次に中道さんをお願いします。中道さんは「環境の教祖様」と言われておられるそうですが、その理由を私たちにも教えていただければと思います。先ほどはいろいろな先生の教育プランをご紹介いただきましたが、いまどのように生き物を大切にしているか、ということもお話していただけるとありがたいです。

中道 環境の話をするとう長くなりますが、きっかけが何だったかについて、少しお話しします。文科省の学習指導要領の中に「総合的な学習の時間」というものがあります。それはコンテンツを学ぶのではなく、コンピテンシー（※1）、つまり「学び方を学ぶ」というもので、それが文科省で始まりました。それより10年ほど前に、私の勤務校は研究開発学校となり、学び方を学ぶための「総合教科」の一つとして「環境学」を立ち上げました。以前は、環境についての学習は、生物、化学、保健、家庭科などで切り売りされていました。でも子供たちはチャンネルを切り替えて学ぶのではなく、環境について自分たちで考える、そういう学びも必要ではないかということで、環境学を立ち上げました。それを私が一生懸命やったので、「環境学の教祖様」と当時呼ばれていたのです。

中野さんの学校だけではなく、私もいろいろな学校での取り組みを紹介しました。現場にいない

のでわからないのですが、周りからは、学校が再開されて元に戻っているというお話をよく聞きます。校長先生がリーダーシップをとって学校としてみんなで一生懸命に取り組んでいる学校がある一方で、リーダーシップのない校長先生もたくさんいらっしゃるようです。そのような校長先生は初めはオンラインに否定的だったにもかかわらず、文科省からオンラインでやるようにという指導が入るやいなや、すぐにそれを実施せよと言って、現場はてんやわんやとなっているという現場の声を聞いたりします。

アクティブラーニングをちゃんとやっている先生がいることが重要です。難しそうですが、先生が一步踏み出したら生徒達も変わってくることがわかっています。しかし踏み出せない先生もいっぱいいらっしゃるのです、そういうこともあるのだと他の先生たちも知り、保護者も知る事です。どんな先生がいい先生なのか、共通認識を持つことが必要ではないかと思います。

城倉 中道さんは当協会が主催の11月17日に開催される「Jカフェ (※2)」でもお話を聞かせていただきます。

さてこれまで3人の方から、教育の現場と地域活動におけるいろいろな動きをご紹介いただきました。それでは中村先生からご感想を伺い、シンポジウムのまとめをお願いいたします。

中村 何事でも、起こればプラスのこととマイナスのことがあるのですが、コロナについてはマイナスのことが多く言われています。でも今日のお話を伺っている中では、良いことも見つかった、というお話だったと思います。何事においても、大事なものは“現場”です。現場できちんとやることが最も大事です。それをする事により、新しいことに気づくのです。

私は子どもの頃、学校に行くのが大好きでした。友達と遊ぶ場としての学校が、楽しかったのです。今日は何をして遊ぶかと工夫する。私たちの子どものころは、学校にはいつ行っても良かったのです。一時間ぐらい前に行っても良い、それが私たちの学校だったのだなあと、ふと今思い出しました。大事なものは仲間と遊ぶことです。

ではまとめとして、3つほど、挙げます。

1つは対立です。先生と親、市民と教育委員会、市民と教職員会みたいに。なんでも間に、“と”を入れる。でも私は“and”ではなく、“in”を入れます。科学を Science and Society ではなく、Science in Society としました。サイエンスは社会の中にあるのです。

今日のお話では、「大変なことが起きたから一生懸命やったら、実は一緒にできるんだね。」ということがいっぱい見えてきました。先生と家庭もそうだし、市民と市議会も。

現在の社会の特徴は、“分断”だということを言う方が多いのですが、コロナを契機におそらく協働・協力しかないということが、世界中の考え方の流れになるでしょう。今日も具体的なことがたくさん出てきたように、これは大きな思想としてではなく、具体例でやっていけばいいんだ、ということが分かります。

2番目に、“教える”ではなく、“学ぶ”というのが大きな流れです。それが具体的にいろいろ出てきたのは、良かったです。そこで皆さんから出てきたように、大事なことは、“学ぶ”をもう一つ超えて、“考える”ということです。科学者の場合で言いますと、科学者は答えを教える人ではありません。どんな問いを出すかが大事で、良い科学者は良い問いを出す人です。1つの答えを解くとさらに大きな問いが出る。だから面白い。この問いだけではつまらないけど、これを解くと大きな問いが見えてくる、これがすごく面白い。そ

のような感覚を子どもたちが持つことが大事です。“学ぶ”ことが、さらなる疑問を持つことにつながる、それが皆さまが言われたとおり、本当に大事なことなのです。

最後に、今日のお集まりは大変前向きで、素晴らしいと思いますが、1つ私が心配なことがあります。それは、今の政府はデジタル庁を作ると言っていますが、これは立ち止まって考えることをしなくて良いのでしょうか。急速に進めるだけで良いのでしょうか。これは怖いのです。

例えば、先ほど小学校と農業の話がでしたが、私たちは子どものころに原っぱで遊んだ記憶を持っています。現在閉じたマンションで暮らしているのは便利だからであって、大人にとってはそれで良いのです。しかし赤ちゃんの時から高層マンションで育つのは、それとは“違う”ということです。

すべてがスマホの中に入っていると思って、スマホで見る。新幹線に乗っていると、昔は子どもが動き回っていましたが、今の子どもは静かです。先日3人のお子さま連れのお母さんと同席しましたのでこれは大変と思いましたが、乗った途端、幼稚園、小学校低学年、中学生くらいの兄弟でしたが、3人とも京都までずっとスマホを見ていました。富士山にも関心を示さない。スマホが便利で使うのはいいのですが、しかし生まれたときからマンションで育ち、スマホを見ている人たちが成長してくる。これは、まだデータがとても不足しているので、科学者として答えは申しません。しかし生きものとしての能力は変わります。

いま必要な能力は完全に落ちます。それでいいという人もいます。「ロボットのようになって、AIと組んで・・・」、という人たちもいます。38億年、生きものとしてやってきた私たちが今も生きている。それをベースにして生きているのですから、何もチェックしないで、「ああ、そうですか」で変わってしまってよいのでしょうか。これは私の個人的な疑問ですが、皆さまも言われていた通り、一度、全体でクエスチョンマークをつけていかないといけませんよね。「これは便利でいいですね」とやっていくと、大人はそれなりに良いのですが、子供はどうでしょう。赤ちゃんのときからその世界に入ってしまったら、人間はどうなるのでしょうか。世界のなかの誰もそれを知らないのです。

コロナのあと、オンラインで働くなど、やり易くなることもあるために、「まあ、いいかなあ」と思ってしまうので、最後に付け加えさせていただきました。

城倉 中村先生ありがとうございました。心に響くお言葉をいただきました。大きな流れで変わっていくよりも、具体的なことからやっていけばいいのだということと、“学ぶ”を1つ超えて“考える”ということをしていかなければならない、など、とても示唆に富んだお言葉をたくさんいただきました。生まれたときからデジタルのなかで育つとしたら人間はこの先どうなっていくのか、本当に誰も知りませんので、一つ一つ考えていかなければならないのだと思いました。それでは、パネルディスカッションをこれで終了します。

※ 1. コンピテンシー:知識だけでなく、スキル・態度を含めた人間の全体的な資質・能力

※ 2. Jカフェ:大学女性協会 生涯学習委員会が担当して開催しているお話会。年3〜4回程度開催。講師は会員の中から自薦他薦してもらい、委員会で決定している。

アンケート結果報告

A. 概要

公開シンポジウム

日時：2020年10月18日（日）13:30～16:30

形態：対面参加と ZOOM によるオンラインの併用

B. 参加者

参加者数：対面参加者 38 名、オンライン参加者 49 名 合計 87 名

アンケート回収数：会場での回答(対面参加者) 14 名

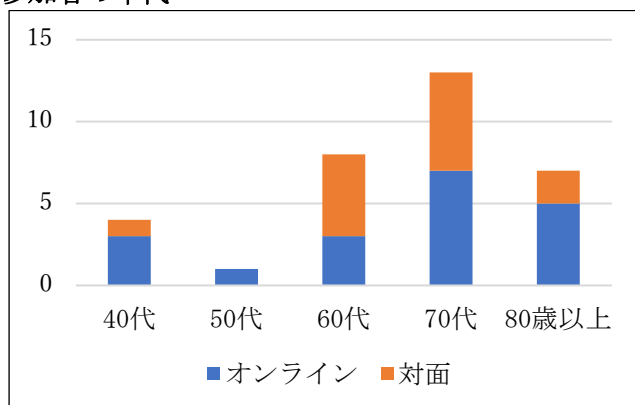
グーグルフォームによる回答(オンライン参加者) 19 名

参加形式は、対面 44%・オンライン 56%であった。

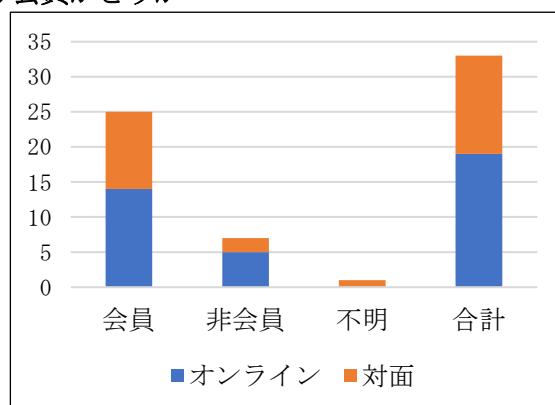
また、アンケートの回収率は 38%（対面参加者 37%・オンライン参加者 39%）であった。

以下に、アンケート結果を報告したい。

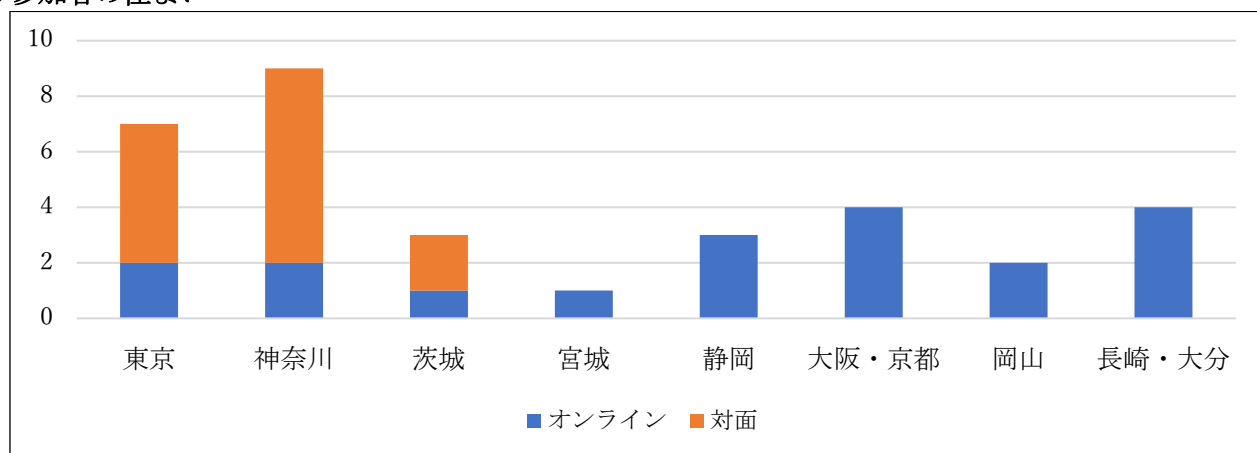
◆参加者の年代



◆会員かどうか



◆参加者の住まい

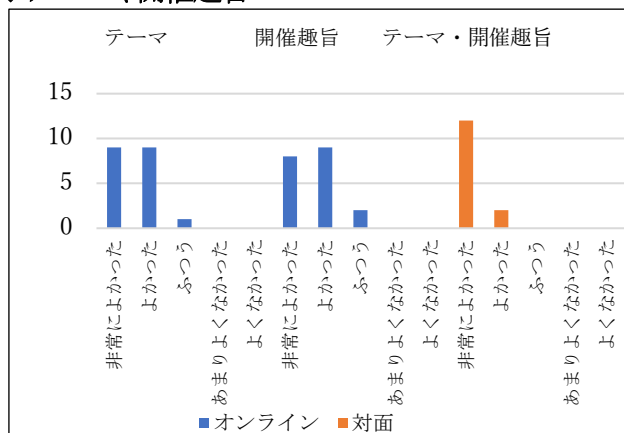


参加者の年代は、70 歳代 39%、60 歳代 24%、80 歳以上 21%であった。70 歳代は対面参加とオンライン参加がほぼ同数であったのに対し、60 歳代は対面が多く、その他の年代はオンラインでの参加の割合が高かった。

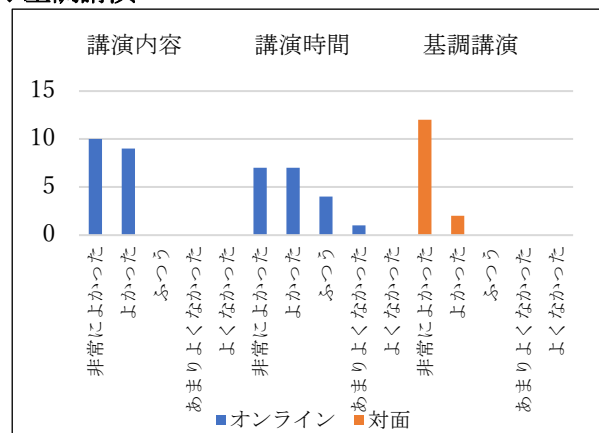
参加者のうち、大学女性協会会員は、対面では 79%、オンラインでは 74%であり、非会員は対面よりオンラインを選択する場合が多かった。また、お住まいは、対面参加者は東京・神奈川・茨城の 3 都県だったのに対し、オンラインでは、10 都府県からの参加があった。オンライン開催は、居住場所にかかわらず参加できるメリットがあることを再認識する結果となった。

C. 内容の評価

◆テーマや開催趣旨

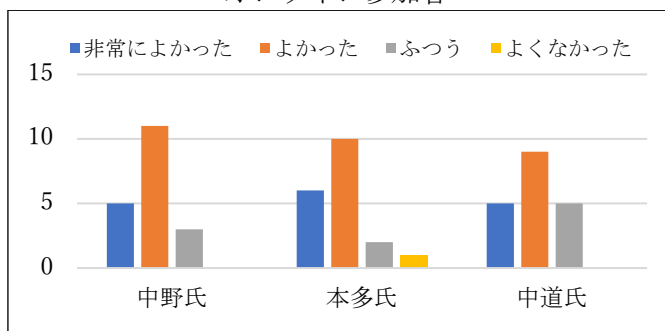


◆基調講演

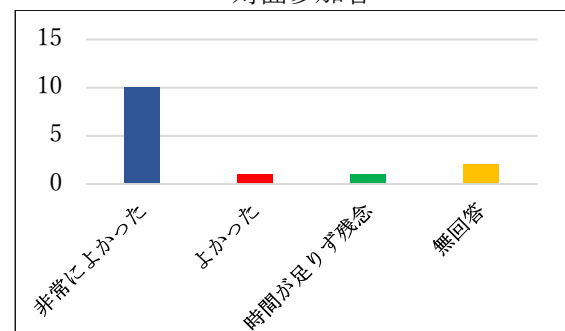


◆パネルディスカッション

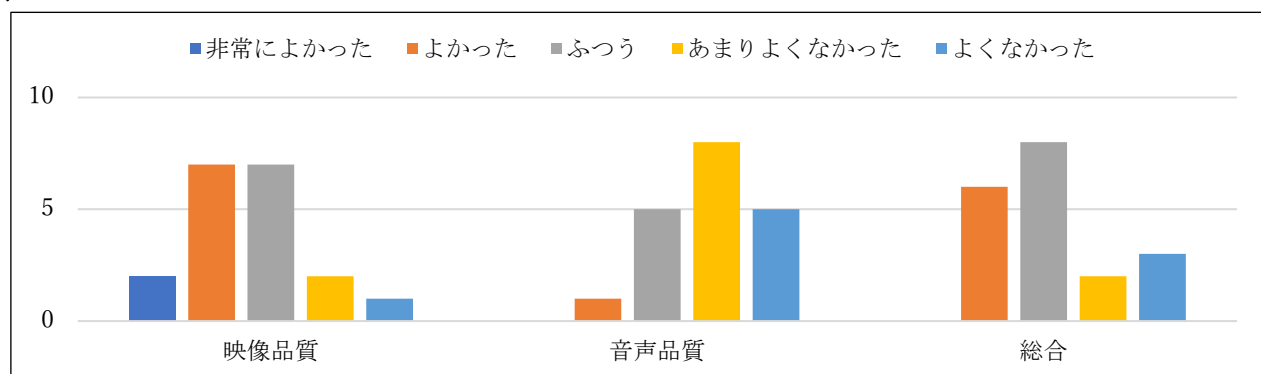
オンライン参加者



対面参加者



◆ズーム



テーマや開催趣旨については、1～2名から「ふつう」との回答があった以外は、「非常に良かった・よかった」と回答されていたことから、本シンポジウムについて主催者が意図したことが理解され、受け入れられたと考えられる。

基調講演については、講演時間を除いては、「非常に良かった・よかった」と回答があり、中でも、対面参加者の満足度が高かったことがわかる。

パネルディスカッションについては、対面参加者の満足度が非常に高かったのに対し、オンライン参加者の回答は「よかった」がいちばん多く、「非常に良かった」という回答がそれより少なかったり、「ふつう」などの回答あったりしたのは、オンライン配信の不備が影響しているのかもしれない。

ズームに関する回答に関しては、音声の品質は「あまりよくなかった」という回答がいちばん多かった。総合的に見ても「ふつう」がいちばん多く、「あまりよくなかった・よくなかった」という回答が26%あるなど、課題の残るものとなった。

以下、参加者のコメントや感想から、いくつかを紹介したい。

◆基調講演に関するコメント、感想など

- ・人間が生き物の中の一つであるという認識を皆が持てれば人間が生存するための環境破壊を縮小できるようになることを、わかりやすくご説明いただき参加できてよかったです。
- ・扇形の生命誌絵巻は印象的でした。“地球に優しく”とよく口にしていましたが、「上から目線」だったのですね。これからは「中から目線」を意識していきます。
- ・コロナは大変だけれど、今がチャンスというのは、勇気づけられる言葉です。何ができるか考え行動したいと思います。
- ・科学者の先生が論理より/だけでなく、「愛づる」ことが重要と指摘されたことを大変興味深く感じました。これが科学の基盤ではないかと思った次第です。
- ・他の科学者とは違って、「くらしと科学」を一体化した人間としてとらえておられたのが新鮮でした。

◆パネルディスカッションに関するコメント、感想など () は、各パネリストへのコメント

- ・学校の真価、教育の真価を問う機会をくれたコロナ、と考えると、今後も益々考えることの大切さを忘れず対峙していく姿勢を保とうと思います。
- ・(中野氏)「学校って何だろう」という投げかけは「学校イコール教育現場」との認識を変える強烈な「コトバ」だ。
- ・(中野氏)教師主導ではなく、生徒からの声をこれからもどんどん取り入れて、生徒たち自身で新しい学び方や生徒同士の繋がりを持ち方等、見つけられるといいですね。
- ・(中野氏)コロナ禍に対応するのは、大変だと思いますが、これは学校教育の大きな転機になること請け合いです。私立であることを最大限に活用して、先駆けとして、日本の教育をひっぱり抜いていく一校となってください。
- ・(本多氏)なんとなく「教育は学校にお任せ」という気運が行き渡っていた現代に、コロナの鉄槌が下った気がします。それをうまく受け止め、行動に移していってほしいグループの活動を拝見し、学校と家庭の連携がよいバランスを保つ教育に変わっていくだろうと、期待を抱きました。
- ・(本多氏)コロナ禍中での仕事と家庭(特に育児)の両立で大変ご苦労されている中で、アンケートを実施され、さらに教育委員会や市議会に働きかけられていることを知り、とても素晴らしい活動をされていることに感服しました。
- ・(本多氏)思い切って行動を起こし、働きかければ、大きな力になれるとのメッセージをいただきました。
- ・(中道会員)「気づきを変容に」「?と!」というような教育の本質に近づくいろいろな命題を現場の教師たちが考える時間が取れるような教育現場になってほしい、とつくづく思います。

◆今後取り上げてほしいテーマなど

- | | | |
|-------------------------|-------|---------------------|
| ・基調講演第2弾 | ・環境問題 | ・オンライン教育 |
| ・なぜ日本では女性管理職がなかなか増えないのか | | ・男性の立場から見た女性の社会進出 |
| ・女性のこれからの生き方とは | | ・ネット社会と地域や家庭のつながり |
| ・SDG s の解説、JAUW の活動との関連 | | ・日本女性の知性 |
| ・支部で若者が取り組んでいる活動紹介 | | ・iPS 細胞の現状と将来の展望 など |

シンポジウムを終えて

2020 年度シンポジウム企画委員長 城倉 純子

ご登壇くださいました講師の皆さま、会場とオンライン参加の皆さまに、心よりお礼を申し上げます。本年当初から瞬く間に世界中に広がった新型コロナウイルス感染症は、私たちの日常を脅かし、多くの人々の生活にさまざまな影響をもたらしました。そのような中にありましても皆様にはご参集いただき、シンポジウムを開催することができましたことに感謝いたします。

当協会にとりましてオンライン方式による事業の開催は初めての体験でした。まだ確立されたツールが広く共有されていなかった中、企画委員会と実行委員会が力を合わせ、会員のそれぞれのスキルを結集し取り組んだ協働作業は手探りの連続でしたが、今後の事業展開への大きな精神的財産ともなりました。

当協会のシンポジウム及び全国セミナーの開催は1981年の文部省国庫補助事業としてスタート（補助事業としての形態は2004年まで継続された）し、40年の歴史をもつに至っております。その間、様々なテーマを追究してきました。中でも2018年より掲げてきた「教育・ジェンダー・共生」のメインテーマは時代の主要課題を的確に分類、表現したものになっていると思います。男女共同参画をジェンダーとの表現も用いて、より明確に現状を追求しようとする姿勢が日本社会に定着しつつあります。その動静をキャッチしてのテーマの立案は、GWI（国際大学女性協会・本部ジュネーブ）をとおしてグローバルな視点における活動も展開してきた当協会の、長い歴史における一貫した追及姿勢の成果であるということができると思います。

基調講演において中村桂子 JT 生命誌研究館名誉館長は、「人間は生き物である、万物の上でもなく下でもない、自然を尊重し自然と共に生きる存在」との根源的な命題を發してくださいました。それを受けて教育と地域と家庭の現場から、それぞれの課題に向き合ってきた3名の方々が、報告と所感を述べてくださいました。今回のサブテーマ「コロナ禍を契機にみえてきた教育の本質」は、「教育」を活動趣旨の三本柱の中心に据えてきた当協会にとりましては、長引くコロナ禍下にあつての必然的な内容でした。30代から80代にわたる世代が一堂に会し、考えを共有することができたこの場は大変貴重な機会となりました。

今回はさらにサプライズ企画として、国連事務次長・軍縮担当上級代表の中満泉様に、コロナ禍における人間の安全保障・国連の取り組みに生じた変化・軍縮と人間の安全保障などについて、そのご経験とお立場から、日本女性への期待と要望のメッセージを頂戴いたしました。激務の中、私たちの依頼にお応えいただきましたことに心からの謝意と敬意を表します。

今回のこの企画の趣旨が次年度の全国セミナーに継続して生かされ、さらに当協会の活動の指針となっていくことを期待しますとともに、皆さまのより良い今後の生活の参考としてもお役に立つことができますようにと願い、シンポジウムを終了させていただきます。

メッセージ

国連事務次長・軍縮担当上級代表 中満 泉

コロナ危機を考える今回のシンポジウムの包括的なテーマ「教育・ジェンダー・共生」に沿い、コロナ禍とアフターコロナにおける人間の安全保障・国連の取り組みに生じた変化・軍縮と人間の安全保障などについて、国連で重職を務められる中満泉様に、そのご経験とお立場から、日本女性への期待と要望のメッセージをお寄せいただきました。

皆様にこのメッセージを送ることができ、すことを大変嬉しく思います。私は国際平和と安全保障の分野において、女性の平等参加を推進し、特に若い世代への支援をミッションとしています。

2020 年は、第 4 回世界女性会議北京行動綱領 25 周年記念、国連安保理決議 1325 号の 20 周年記念、そして女性と軍縮に関する国連総会決議の 10 周年記念という特に重要な年です。私たちはこの記念すべき年を今までの成果の評価だけではなく、ジェンダー平等達成のために、今後どの分野で努力を加速すべきかを見直す契機とすべきでしょう。

軍縮と国際安全保障の分野においては、未だに女性がいないことが目立ちます。私たちはあらゆる場で男性と同じ決定力を女性が持てるよう女性の参加を増やし、リーダーとなる機会を増やすよう積極的に働きかけています。国連では今年、幹部レベルでのジェンダーパリティを達成し、女性の平等参加を妨げる偏見や障害を取り除くために、一時的な特別措置として女性職員数のノルマを設けました。ジェンダー平等は、道徳的な義務や基本的な人権ではありません。女性やマイノリティの参画の促進は、平和と軍縮の推進上、強力なツールでもあり、軍縮と軍備管理における女性の貢献は決して軽視できません。若い女性活動家は、対人地雷禁止条約や核軍縮運動など平和運動の最前線に立ち、女性が率いる市民団体がノーベル平和賞受賞に貢献してきました。

しかしコロナ危機は、既存の不平等を深刻化させ、ジェンダー平等と女性の権利におけるこれまでの成果が逆戻りしてしまう恐れがあります。国連事務総長は最近、何千年も続いた家父長制が、男女や子どもたちすべての人々にど

れほどの悪い影響を及ぼしてきたかをコロナ危機は物語っている、と言いました。多くの女性が職を失い、ジェンダーに基

づく暴力が劇的に増加、女性の経済的身体的な安全が脅かされています。この後退を取戻すのに何世代もかかるでしょう。

教育の分野でも影響は深刻です。何百万人もの子どもや若者が登校できなくなりました。教育における大惨事になりかねず、学校に戻るのは、女の子や若い女性が最後になり易く、ジェンダー平等における後退を招きかねません。

このコロナ危機は、同時により強く平等な世界へと再建する機会でもあります。SDGs は、より良い未来への道を示しています。例えば、平和と軍縮教育を含め教育への投資を引き続き行い、特に女の子に最大限の効果をもたらすようにすることで、質の高い教育に関する SDG4 とジェンダー平等に関する SDG5 を同時に達成できます。

今日の若者はとてつもない力、そして責任をもち、教育を受け積極的です。力を持った若者たちは彼らの社会、例えば核兵器に対する見方に決定的な影響を及ぼすことができるのです。斬新な考えと視点を持つことで、私たちは世界の重大な危険に対して、解決策を見つけることができます。だからこそ、ジェンダー平等と女性の権利は、より良い未来を創るために必要不可欠なのです。

皆様方と共にジェンダー平等・平和・軍縮に向けて取り組んでいくことを、国連を代表して、そして私一個人としてもここにお約束いたします。



一般社団法人 大学女性協会 2020 年度公開シンポジウム担当委員

総 括 会 長 加納 孝代
企画委員長 副会長 城倉 純子
実行委員長 副会長 森川 淳子

企画委員会

岩村 道子 佐々木澄子 嶋田 君枝 鈴木千鶴子 中道 貞子 長谷川瑞穂
森川 淳子 山下いづみ

実行委員会

穂田 信子 岩村 道子 江原 孔江 太田 恵子 窪田 憲子 佐々木澄子
嶋田 君枝 鈴木千鶴子 富田伊津子 中道 貞子 中山 正子 中山 律子
中野眞佐子 端本 和子 長谷川瑞穂 藤谷 文子 丸山 若重 山下いづみ

報告書作成

加納 孝代 佐々木澄子 嶋田 君枝 城倉 純子 鈴木千鶴子 中道 貞子

本部事務職員

薄田 明美 中島 鏡子

JAUW 公開シンポジウム 2020

教育・ジェンダー・共生

—コロナ渦を契機にみえてきた教育の本質—

発 行	2021 年 2 月 28 日
発 行 者	一般社団法人 大学女性協会 〒160-0017 東京都新宿区左門町 11-6 パトリシア信濃町テラス 101 Tel : 03-3358-2882 URL : https://www.jauw.org
印 刷	ヤマノ印刷株式会社 〒101-0044 東京都千代田区鍛冶町 1-6-15 井門神田駅前ビル Tel : 03-3253-8851 Fax : 03-5297-2713

